

進駐軍向けキャバレーと三鷹の戦後史

―戦後占領期における近郊都市の変貌過程―

長嶺 修

第二次世界大戦の敗戦後、三鷹に「進駐軍向けキャバレー」が開設された。そのこと自体は、『三鷹市史』にも記載があり、自治体の編んだ公的な歴史における既知の出来事であるが、そこにおいてはこの「進駐軍向けキャバレー」なる場所が、どのような組織が設立した、どのような施設であったかということまでは詳らかにされていない。本稿ではその欠落を補うと共に、そこを足掛かりとして、東京西郊にあって、戦時期から急速に近郊都市化を進展させていった、三鷹の戦後占領期における地域社会の変容過程を、占領政策や各種法制度といった背景部分も含め、種々の資料を繋ぎ合わせながら歴史的に跡づける。三鷹の近郊都市化は、戦時期における軍需企業の進出に伴う人口増が要因となったが、そうした企業の代表格である日本無線の女子寮であった建物が、戦後「進駐軍向けキャバレー」に転用され、さらに戦後の教育改革により、いわゆる「六・三制」が導入されると、新制中学校の校舎として用いられることとなった。「進駐軍向けキャバレー」を経営した日本無線を母体とする会社、三鷹商事は、三鷹で初となる映画館事業なども手がけた。こうして、戦時期からの近郊都市化と連続しつつ、敗戦と占領という未曾有の事態の中で、三鷹の街並みは変貌を遂げていった。

キーワード：地域史 占領期 近郊都市化 RAA（特殊慰安施設協会） 日本無線
映画館 太宰治

1 はじめに

1.1 問題の所在

1956（昭和31）年10月発行の『日本瓦斯協会誌』に、労働省の官僚であった松澤春雄による、「わがガスストーブいまいづこ」と題された随筆が掲載されている。文中には概略、次のようにある。

著者の松澤は終戦後、軍服を脱ぎ東京に戻ったが、職場を失うことはなかったものの、住むべき家がない。足を棒にして、ようやく三鷹の小さな家を探し当てた。妻子を疎開先から呼び寄せると、次に食糧問題が待っていた。小金井あたりまで行き、農家と物々交換をしたり、衣類を古着屋に売り払って糊口を凌いだ。その品物も尽きはじめた。月給だけでは生活が苦しく、立川の基地から三鷹のキャバレーへ遊びに来るGIたちと親しくなり、土日は彼等から直接あちらの品物を買ひ、人を通じて転売するというアルバイトに勤しんだ。これは月給を上回るほどの収入になることもあったが、何となく気味が悪く、半年ばかりしてやめた。いよいよ売る物がなくなり、押入からギターや電気ストーブ、ガスストーブなどを引っ張り出し、骨董屋を呼んだが買い取ってはもらえず、ギターと電気ストーブは三鷹の物品交換所に置いてもらうことにした。2週間目にギターだけが姿を消しており、聞けば、キャバレーから買いに来たとのことで、1000円に少し欠けるくらいの金額を手にした……。¹⁾

上記の文中に登場する、進駐軍²⁾の利用したキャバレーが、戦後の三鷹には存在した。三鷹に関する書籍や冊子（地域資料）³⁾などで、そのことに言及しているものは少なくない。例えば、『三鷹市史 通史編』は、こう

述べる。

「そして米軍が使用するために町内の施設のいくつかが接收されていった。日産厚生園は『ルーズベルト・レクリエーションセンター』と呼ばれる娯楽施設に変貌し、下連雀にあった日本無線施設は米軍兵士用のキャバレーに姿を変えた。」（三鷹市史編纂委員会編・三鷹市教育委員会事務局生涯学習推進室市史編纂担当編 2001: 163）

一方、写真集『みたかの昔』（三鷹市教育委員会社会教育課編 1990）には、三鷹市立高校⁴⁾であるとする 1951 年（昭和 26 年）に撮影された校舎の写真に、「進駐軍専用キャバレーを買収し校舎として使用した。講堂はダンスホールであった。三鷹中学校内（現・一中）」（同書: 127）とキャプションが添えられている。この記述から、進駐軍向けのキャバレーは、現在の三鷹市立第一中学校敷地内に開設されていたことが解る。しかしながら、三鷹の公的な刊行物には、戦後の三鷹に存在した進駐軍向けキャバレーが、どのような組織が運営する、どのような施設であったのか、説明のあるものは、管見の限り見出せない。

そもそも、『三鷹市史 通史編』の叙述の仕方では、そこが米軍により接收された施設のように読めてしまうのであるが、「ニューキャッスル」という店名を持つそのキャバレーは、日本側が設置した進駐軍のための「慰安施設」である。そこにはいったい、いかなる経緯や事情があったのであろうか。

初期のニューキャッスルを運営したのは、RAA という団体である。RAA は、「Recreation and Amusement Association」の略称で、当初は日本語で「特殊慰安施設協会」を名乗っている。良家の子女を守るため、「性の防波堤」を築くという名目のもと、敗戦からほんのわずかな期間で立ち上げられた。

1946（昭和 21）年の 1 月末に、RAA はニューキャッスルの運営から撤退した。にもかかわらず、このキャバレーは、1948 年 4 月に三鷹中学の校舎として明け渡される前まで存続した。キャバレーを切り盛りしていたのは、三鷹商事という会社である。この会社は、敗戦後、日本無線の子会社として発足した。ニューキャッスルは、日本無線の従業員寮を転用した施設であり、三鷹商事は自社の管理する物件でキャバレーを直営した形となる。また、三鷹商事という会社は、今ではほとんど忘れられた存在となっているが⁵⁾、進駐軍向けキャバレーだけでなく、三鷹を拠点に種々雑多な事業を展開した。

本稿では、このような進駐軍向けキャバレーの存在を起点に、戦時期から足早に近郊都市へと変貌を遂げていった、三鷹の戦後占領期を振り返る。太宰治研究の泰斗、安藤宏は戦後占領期の三鷹について、次のように述べている。

「震災後の再開発、昭和十年代の軍需産業の振興に続き、この時期の三鷹はいわば第三の歴史的な転換期にあった。それはいわば『闇市』に代表される、戦後の混乱のつぼを体現する風貌なのであり、すでに『辻音楽師』⁶⁾を演じることのできる郊外の田園都市ではなくなっていたのである。」（安藤 2009）。

しかしながら、大規模な闇市が出現した新宿などの東京区部などと比べ、三鷹のような東京西郊の戦後占領期の歴史に言及される機会は少ない。あるいはこの時期、三鷹を全国的に知らしめた事柄として、1948（昭和 23）年の太宰治の情死と駅構内で電車が暴走し多くの死傷者をだした翌年の「三鷹事件」が挙げられるが、事件そのものではなく、その背後に広がる三鷹という町について触れた記述は思ったほどには多くないのである。本稿は、安藤が言うところの三鷹の「第三の歴史的な転換期」について、その具体的な様相を明らかにしていくことを目指す。

1.2 近郊都市化の背景

1957（昭和 32）年に刊行された、国際基督教大学農村厚生研究所『三鷹市—社会生活の諸相—』の巻頭を飾る、森岡清美が執筆した「歴史的概観」の冒頭部分には、次のようにある。

「大都会の生活の名残と田舎の生活とが落ちあい渦を巻く地帯は次第に西へ後退して、昭和の時代に入ったときには三鷹もまたこの地帯のなかに自らを見出していた。そして第二次世界大戦が始まった前後よりこのかた、三鷹は大都市の生活と田舎の生活とが直接にぶつかりあい、烈しい渦を巻く地点の一つに数えられるに至った。」

表 町制時代の三鷹の人口推移

1940（昭和 15）年	21,536 人
1941（昭和 16）年	26,996 人
1942（昭和 17）年	30,057 人
1943（昭和 18）年	34,967 人
1944（昭和 19）年	39,563 人
1945（昭和 20）年	40,253 人
1946（昭和 21）年	39,347 人
1947（昭和 22）年	55,875 人
1948（昭和 23）年	53,062 人
1949（昭和 24）年	55,546 人
1950（昭和 25）年	54,198 人

出典「三鷹市統計データ集 2023」

三鷹は 1940（昭和 15）年に村制から町制へと移行し、そこから 10 年という期間を経て、1950 年に市制を施行した。その間の人口総数の推移は表のとおりだが、少し前から見ていくと、中央線三鷹駅が開設された 1930 年の人口は 7,863 人、初めて人口総数が 1 万人を突破したのは、1934 年の 10,199 人である。その後微増傾向であったのが、1938 年以降、1944 年にかけては、毎年 5 千人前後もの増加となった。

この人口増の要因とされるのが、軍需企業の進出である。1931（昭和 6）年、「満洲事変」の勃発をきっかけに、いわゆる「十五年戦争」に突入し、1937 年には日中全面戦争へと至った。東京市域に隣接する多摩地域は、この時期に軍の施設や軍需企業が数多く集まり、「軍都」化していった⁷⁾。三鷹も例外ではなく、1933 年の正田飛行機創設を皮切りに、1938 年には日本無線の本社工場が大崎から移転し、1941 年に中島飛行機の研究所が着工するなど、軍需で潤う企業が立地し、それらの下請けも含め工業が発展した。その働き手などが三鷹で暮らすようになり、特に日本無線や中島飛行機のような大企業は、三鷹に従業員寮や社宅を設け、来住者の増加を促していくのである⁸⁾。

戦後は軍需工場の動員解除や休業により一時的に人口を減らしたが、海外からの復員や引揚げによる帰国者が溢れる一方、空襲に焼かれた東京区部は住宅や食糧の不足により転入が制限され、相対的に被害の少なかった区部に隣接する三鷹には、疎開先から戻った人が軍需企業の社宅であったところに住み着いたり、引揚者寮が設けられるなど、新たな来住者を迎え、人口が再び増加する。こうして、村制から市制へと移り変わる 10 年の間に、三鷹の近郊都市化が進展した。

本稿が主に対象とするのは、このうち 1945（昭和 20）年から、1950 年に三鷹が市制を施行するまでの期間である。戦後占領期は、通常、1952 年にサンフランシスコ講和条約が公布・発効されるまでの 7 年間を指すが、1950 年には朝鮮戦争が勃発し、日本の「民主化」「非軍事化」を目的とした占領政策の路線が転換された、いわゆる「逆コース」が決定的となる。また、三鷹にとってこの 5 年間は、10 年に及んだ町制期における、敗戦を挟んだ後半部に当たる。この時期の三鷹における近郊都市化は、戦時とどのように繋がり、敗戦と占領という未曾有の事態はどのような変化をもたらしたのか、進駐軍向けキャバレーという特異な施設を足掛かりに探り出していきたい。

1.3 先行研究

旧来の自足的な農村部に、新たな来住者が増え、近郊都市化を進展させていく中で、三鷹は戦後占領期を迎えた。近郊都市化した三鷹に関する研究としては、先に引用した『三鷹市—社会生活の諸相—』（1957）や、その

仕事を継ぐ国際基督教大学社会科学研究所の『近郊都市の変貌過程』(1964)がある。しかしながら、いずれも同時代の現状分析が中心であり、戦後占領期についてはほとんど触れられていない。むしろ進駐軍の存在なぞなかったかのようですらある。

松本康「三鷹市における郊外レジームの形成と再編」(2010)は、都市レジーム概念を応用した郊外レジームという観点から、三鷹を事例に郊外レジームの形成と再編の過程を分析している。レジームとは、集合的目標を達成するために、一群の行為者がつくりあげる構造化された社会関係とし、郊外レジームの特性として、大企業の影響力が希薄である点や圧倒的な新住民の流入を挙げる。1889(明治 22)年に三鷹村が成立して以降の近代から現代へと至る各過程を通史的に概観しているが、戦後占領期については、GHQの民主化政策などにより、旧農村部の名望家レジームが一時的に危機に陥り、その一角に移住者、労働者、革新勢力が食い込みはしたものの、依然としてその中枢は名望家が担っていたとの見通しを立てている。とはいえ、ここで目を向けられているのは、主として首長の立ち位置や議会の構成で、占領期という混乱を伴ったこの時期に地域社会を成り立たせた、様々なアクター間のせめぎ合いのようなものは、ほぼ捨象されてしまっている。本稿では、このせめぎ合いの部分に焦点を当てていきたい。

占領期における地域の歴史を扱った研究としては、例えば西川祐子『古都の占領』(2017)がある。「生活史からみる京都 1945-1952」と副題にあるとおり、インタビュー調査や日記などを含む各種文献調査、調査結果を書き込んだ自前の地図も駆使して占領期京都の生活史を丹念に描き出し、京都における占領軍将兵を対象とする慰安施設についても触れられている。「わたしは今、人々の思い出のなかに散らばり消える間際の記憶や記録のかげらを集めて綴り、パッチワークのごときテキストを制作しようとしている」という西川の方法論には、おおいに共鳴するところではあるが、日本を代表する古都の京都と、東京の新たな西郊として歩みはじめたばかりの三鷹とでは、地域社会のあり方や残された記録の厚みなども自ずと異なる。さらに、占領期と地域の歴史に関しては、都市史の観点から神戸の闇市に焦点を当てた村上しほり『神戸 闇市からの復興』(2018)、ローカル紙の記述から主に葛飾の地域社会での出来事に分け入っていく木村知恵子『占領下の東京下町』(2014)、あるいは研究書という枠を外すなら、中條克俊『君たちにつたえたい 朝霞、そこは基地の街だった。』(2006)、伊奈正司『やけあと闇市 野毛の陽だまり』(2015)、佐賀忠男『別府と占領軍』(1981)、下川正晴『占領と引揚げの肖像 BEPPU』(2020)などを挙げることもできるが、東京西郊の占領期の歴史については、これまであまり問われてこなかった。

1956(昭和 31)年に上梓された鈴木二郎編『都市と村落の社会学的研究』は、これもまた同時代を対象とした社会学的研究ではあるが、多摩地域の立川でフィールドワークを行い、当時「洋娼」とも呼ばれた、進駐軍将兵を相手とする娼婦たちの実態調査にも臨んでおり、「基地の町」としての当時の立川の様子が窺い知れる。また、地理学の分野では、新井智一「東京都福生市における在日米軍横田基地をめぐる『場所の政治』」(2005)が、同じく多摩地域の「基地の町」である福生について、ローカルな政治と場所性との関わりを説明しようとする「場所の政治」研究の文脈から、基地に付随した歓楽街の形成から現代に至るまでを対象に分析している。本稿で俎上に乗せる進駐軍向けキャバレーなどが存在した三鷹も、多摩地域における進駐軍基地経済圏の辺縁に属していたと言えるが、軍事的なプレゼンスは比較的早期に退き、その後は近郊住宅都市あるいは軍需企業たる中島飛行機の研究所跡に国際基督教大学を誘致するなど文教都市としての道のりを歩んでいく。こうして戦後 80 年が経過しようとしている今では、三鷹の進駐軍向けキャバレーは、そのような施設が存在したという事実が僅かに知られる程度で、それ以上の内容についてはすっかり忘れ去られてしまっているのである。

1.4 研究の方法と各章の構成

本稿は、三鷹の戦後占領期についての実証的な歴史研究を企図している。しかしながら、その資(史)料は限

定的かつ断片的な形でしか残されていない。本来であれば、インタビュー調査も試みるべきところではあるが、時間的制約もあり、残念ながら実現することができなかった。代わりに、市史をはじめとする自治体刊行物、企業による当時の社内報や販促物、社史、新聞や雑誌の記事、小説、エッセイ、議会の議事録など、できる限り多くの文献資料を渉猟し、占領政策や法制度といった背景も視野に入れながら、それらの点と点を結んで面を描くように三鷹の戦後占領期の歴史を紡ぎ出していきたい。その面と面を組み合わせで立体とするべく、三鷹の闇市・マーケットや引揚者寮、「ニコヨン」とも呼ばれた自由労働者らによる労働争議などについての論考も準備していたが、紙幅の都合により今回は割愛した。

本章に次ぐ第2章では、RAAという組織の成り立ちなどを概観し、RAA運営時のキャバレー・ニューキャッスルがどのような場所であったのか、関係者らによるテキストを通じてその実像に迫る。そこには、戦地とを結ぶ「暴力」があった。

第3章は、RAAの撤退後にキャバレーを直営した三鷹商事という企業の設立の経緯などを探る。さらに、その最初期の事業である進駐軍向けキャバレーという業態などについても検討していく。

第4章では、キャバレーの建物が新制中学校の校舎として買い取られるまでの流れを、買収した側の動きと併せて辿る。

第5章は、三鷹商事の諸事業を総覧する。この会社は、進駐軍向けキャバレーだけでなく、映画館や書店、雑誌の出版、喫茶店など、多様な事業を展開した。三鷹の代表的な軍需企業であった日本無線から派生した会社であるが、このように、工業系の企業が軍需生産がストップしたため、自社の管理する不動産などを活用して商行為に走ることは、当時「生産サボタージュ（生産サボ）」とも呼ばれ批判的になった。しかし、そうしたなかにあつて、三鷹商事の事業展開はユニークかつ野心的なものであったと言える。

第6章は、三鷹町議会を巻き込んだ、三鷹商事が創立した映画館の売却・買収問題を取り上げる。その背景にあったのが、税の問題であった。

第7章は、この映画館問題のすぐ後に、三鷹商事は廃業に至ったと考えられるが、この点についてはまったく資料を見出すことができず、親会社たる当時の日本無線の状況などから、その幕引きについて推察する。

最後は付論的に、1939年に三鷹に移り住み、戦後も短い年月ながら三鷹に暮らした作家、太宰治と三鷹商事の諸施設とを結ぶ痕跡についても触れておくことにしたい。

*引用文中には、今日の感覚では差別と受け取れる不適切な表現を含んでいるが、本論はそれを容認するものではなく、歴史的資料としての観点から当時のままにこれを提示することとした。言うまでもなく、筆者に差別の意図はなく、このような機会に差別に対する認識をより深めていきたいと考えている。

*また、引用文については基本的に新字・新仮名遣いに改め、句読点を適宜補った。

*年号については、引用文を除き、算用数字を用い、西暦と和暦を併記した。ただし、1センテンスに複数回年号が出てくるような頻出箇所では、煩雑になるのを避け、センテンス内の初出分を除き、西暦のみ記載している。

2 性の防波堤——RAAの設立とニューキャッスル

2.1 RAAの設立

三鷹の進駐軍向けキャバレー・ニューキャッスルは、1945（昭和20）年10月に開業し、RAA（特殊慰安施設協会）が運営にあたった。RAAは敗戦後、間もなく設立された、占領者への「慰安」を担う組織である。「性の防波堤」などとも称された。

近衛文麿の意向を受けた警視総監・坂信弥⁹⁾の指令により、東京の料理飲食業組合をはじめとする料飲接客業界7団体の寄り合いで立ち上げられた。運営資金については、当時大蔵省主税局長だった池田勇人を介して多額の融資を受ける。大森海岸に第一号店「小町園」を、進駐軍第一陣が厚木に飛来した8月28日に突貫作業で開

業した。また、内務省警保局長から各府県の知事・警察長官宛に「外国軍駐屯地における慰安施設について」という無電通牒が発せられ、全国に同様の「慰安所」が開設された。

RAA に関しては、すでに多くのルポルタージュ／ノンフィクションや研究書で触れられてきている（橋本嘉夫 1958、小林大治郎・村瀬明 1961、鎗木清一 1972、大島幸夫 1976、猪野健治編 1978、ドウス昌代 1979、山田盟子 1992、藤目ゆき 1997、ジョン・ダワー 2001、マイク・モラスキー 2006、小沢昭一・永六輔 2007、恵泉女学園大学平和文化研究所編 2007、平井和子 2014、住本利男 2014、「戦争と女性への暴力」リサーチ・アクション・センター編〔西野瑠美子・小野沢あかね責任編集〕2015、貴志謙介 2018、吉見義明 2019、芝田英昭 2022、村上勝彦 2022、平井 2023、他）¹⁰⁾。

とはいえ現在、進駐軍に対して性的「慰安」を提供する組織が存在したという事実は、人口に膾炙しているとまでは言えないだろう。ところが、敗戦からまだ、それほど年月が経過していない時期の自治体など公的機関が刊行した書物には、RAA に言及しているものがある。例えば、『東京百年史 第5巻』には、「占領軍将兵の婦女子に対する暴行を危惧した」ため、「当然のこととして、積極的に『慰安婦』を提供することでこの危惧の解決を行なおうとし」「R・A・A が組織され、米軍の『受容』に応じて、慰安婦を『公式』に提供した」（東京百年史編集委員会 1972: 1356）とあり、半ば公然の存在として、当時の人々には受け止められていたことを窺わせるのである¹¹⁾。

RAA は、都内を中心に箱根や熱海で、「特殊慰安所」の他、キャバレーやダンスホールなどを手広く経営し、多摩地域には調布や立川、福生、西多摩郡三田村（現青梅市）にも関連の施設があった（坂口勇造編 1949）。

2.2 進駐軍向け性買売施設の拡張

RAA は日本側が占領者の性暴力を恐れ自発的に創設したものだが、GHQ¹²⁾ の側からも、敗戦の年の9月に、東京の性買売施設を拡充するよう要求があった。その差配役を命じられたのが、東京都民生局予防係長の職にあった与謝野光（与謝野鉄幹・晶子の長男）である¹³⁾。

与謝野は当時のことを記事に書き残しているが、GHQ の司令部に呼び出され、軍医総監のウェブスターから「いま東京に十万人の米軍兵士がいる。彼らの性の処理のために適当な場所を捜したい。ついては君に協力してもらいたい」と告げられた。そして、トラブルを起こさせないため「将校用と、ホワイト用、ブラック用と三カ所に遊ぶ場所を分けてくれ」と促された。与謝野はそこで、吉原など旧公娼街を白人向け、鳩の街など旧私娼街を黒人向け、向島など料亭街を将校向けとした。「米兵を振り分けられた遊廓や赤線の経営者たちは、自分たちの商売が再開できたことを素直に喜んだ」という（与謝野 1990: 132-143）。

こうした措置は、戦災を受けた戦前からの集娼地区が息を吹きかえす役割も果たした。

2.3 進駐軍向け「特殊慰安施設」の閉鎖

進駐軍の兵士に性病罹患者が著しく増加したこと、また、従軍牧師や報道を通じ米国で兵士による性買売の実態が伝えられ、抗議を受けたことにより、GHQ は 1946（昭和 21）年の 1 月、人権の観点から日本政府に公娼制を廃止するよう通達した。日本政府はこれを受け入れ、公娼制の廃止に踏み切るが、業者にはエリアを限定し、特殊飲食店として体裁を改めることで、営業を継続できるよう約束をしていた。これが実質上公認の「赤線」地帯となった。さらに、その周囲などには非公認集娼地区の「青線」も形成される。

加藤政洋（2009: 66-68）によれば、「終戦から一ヵ月後の九月十五日、東京都が『進駐軍用特殊慰安施設』として提出したという一覧表」では、「予定されていた地区は全部で十カ所」に過ぎなかったが、「それからわずか二ヵ月のあいだで、二十五カ所まで急増」したという。加藤は「十カ所だけでは、とても進駐する軍隊に対応しきれないと見た政府がせっついたのでろうか」と憶測しているが、増えたのは上述した GHQ の申し入れによる

ものだろう。この25ヵ所の多くが、「赤線」地帯として生き残ることになるのである。三鷹はその25ヵ所には含まれていなかったが、業者はエリアのさらなる拡張をはかり、1949（昭和24）年には三鷹駅北口近くの武蔵野市域に青線「八丁特飲街」が出現し、周辺住民の反対運動が引き起こされている¹⁴⁾。

公娼制の廃止に続き、1946（昭和21）年3月には進駐軍向けの特設慰安施設が全面的に立入禁止（オフ・リミット）となった。RAAの「特殊慰安施設」で働いていた女性たちは一斉に放り出され、「パンパン」と呼ばれた街娼増加の要因となった¹⁵⁾。

2.4 RAA 運営時のニューキャッスル

ここまで敗戦後の性買売をめぐる構図を素描してきたが、それではRAAが運営していた当時の三鷹の進駐軍向けキャバレー・ニューキャッスルとは、どのような施設であったのか。まずは、『R・A・A 協会沿革史』（坂口1949）のニューキャッスルの項目を引用しておこう。

「昭和二十年十月十七日キャバレー及慰安所として依託経営を始め、非常な繁盛を見たのであるが、翌二十一年一月三十一日に契約を解消して閉店した。短期間ではあったが、立川を中心とする進駐軍の将士に喜ばれ、珍重されたことは特筆に値する。」

注目されるのは、キャバレー及び慰安所として経営していたという点である。即ちここもRAAの運営時にあっては、性買売を目的のひとつとする「特殊慰安施設」のひとつなのであった。

RAAの本部で総務係長を務め、上司と衝突して三鷹営業所に飛ばされたという鍋木恵喜は、自著『戦前戦後 社交（料飲）史』（1976: 31-33）に三鷹での体験を次のように記している。

「赴任した三鷹営業所は三鷹駅から徒歩で三十分、下連雀にあって五万坪の広大な敷地の中に立つ、元日本無線の女子寮で、二十畳敷上下八室が五棟、正面玄関の左右に各百五十坪のホールがあった。（女子寮の食堂を改造してホールにした）。ホールと五棟の間にチケット売場を設け、慰安婦の方は、そこでチケットを買ってショウトタイムなり一泊するというわけになる。当初ダンスオンリー組、芸妓¹⁶⁾組両方で百五十人ほど収容した。午後五時開店でホールで踊り（ホールはビールを主体に売る）女性を買いに行くという具合、当初ダンスオンリー組には赤、芸妓組は黄の記章を胸につけさせていたが、芸妓組が売り切れとなると、否応なくダンスオンリー組に襲いかかる、オンリー組は悲鳴を挙げて事務所に逃げ込む、こんな毎日が一ヵ月も続いた。然し一ヵ月後には逃げ帰る女性は一人もなくなった。当時三鷹にきた兵隊は殆んど沖縄空襲部隊で、全く気が荒く手のつけられない者が多かった。八時ごろになると殆んど売約済となって、あぶれた兵隊はビールを勝手に持出し、制すればピストルを向けるなど全く治外法権の場所となった。毎夜女を中心とする白、黒の殺人事件、一人の女性を何人もの兵隊で侵す、あげくキャンプにさらって行く者、ホール、寮の窓ガラスは殆んど破られ、当時修理も容易でない時に、便所を殆んど壊される等、凡らく生涯味わえない悲惨な仕事であった。かくて器物（特に便所）を破壊される度にオフリミット。四、五回のオフリミットで三鷹の営業所は廃止することになって、五ヵ月目で私は再び本社に戻るようになった。」「三鷹の営業所が度々のオフリミットによってついに閉鎖、散り残った女性、折良く協会が熱海温泉大湯の二階にキャバレー“ニューアタミ”の開場を機会に、その方に移すことにして私は本社に引揚げた。」

気をつけておきたいのは、「当時三鷹にきた兵隊は殆んど沖縄空襲部隊」だとしている点である。終戦直後、日本に乗り込んできたのは、武装解除を旨とする実戦部隊であり、戦地から直接送り込まれてきた。荒ぶる戦場

のメンタリティがそのまま持ち込まれ、それが「特殊慰安施設」のようなハメをはずす場での暴力を誘因したと考えられる。やや文学的な表現をするなら、三鷹の進駐軍向けキャバレーは、地上戦の行われた沖縄と「暴力」を介し通底していたのである。

三鷹市女性史聞き書きの会編『三鷹の女性史』(2003)には、以下のように、進駐軍向けキャバレーに関する回想が3カ所ある。

「市立第一中学校あたりには戦後、一時進駐軍のキャバレーがあり、米兵の出入りが多くありました。道幅は九尺(二・七メートル)で狭く、我が家の門が車に当てられたり、近所の家では、トラックが家の中に飛び込み奥様が亡くなられました。」(177-178)

「今の一中の所にはアメリカ軍の兵隊がいて、進駐軍のキャバレーみたいなものがあって派手に騒いでいました。私達は、恐ろしい様な気がして暗くなると、戸じまりをきちんとして外には出ないようにしていました。」(198-199)

「その頃、一中は進駐軍用のキャバレーになっていて、夜は酔っ払いが多く、恐ろしくて歩けませんでした。」(236)

いずれもネガティブな印象を語っているが、この初期の「ニューキャッスル」の荒れた雰囲気の影響しているのではないかと推察される¹⁷⁾。

3 日本無線の子会社として——三鷹商事の発足とキャバレー事業

3.1 RAA 撤退後のニューキャッスル

RAA 撤退後にニューキャッスルを経営したのが、三鷹商事という会社である。三鷹商事の手書きによる社内報『月報みたか』(1947)に連載された「三鷹商事史」によれば、この会社は、日本無線の庶務課長であった岡枝健一の提言により発足した。日本無線は上述のとおり、1937(昭和12)年に本社工場を三鷹に移転し、戦時期、軍需で潤った三鷹を代表する企業である。戦後、軍需生産がストップして収益があげられなくなったため、日本無線の従業員寮などを商用施設として活かす会社を立ち上げるべく岡枝が提案し、社長の承認を得た。

三鷹商事が正式に認可されたのは、1946(昭和21)年の1月である。社長には日本無線と兼務で中島進治が就任し、三鷹商事の中心人物で実質的に経営を取り仕切った岡枝は、常務となる¹⁸⁾。

その正式発足前にスタートを切っていたのが、1945(昭和20)年10月に開店へと漕ぎ着けた進駐軍向けキャバレーの事業であった。そのためであると考えられるが、既述のとおり、進駐軍向けキャバレーは当初、三鷹商事がRAAに運営を委託する形をとった¹⁹⁾。確定的な資料はないが、その後の施設売却について書かれたものを読む限り、建物の登記上の所有者は日本無線のままであったようである。

RAAに運営を委託し、会社の正式発足前に営業を始めた経緯についても資料がなく、よく分からない。しかし、状況証拠的にいくつかの理由を推測することは可能である。まず、前章で述べたように、1945(昭和20)年9月の段階では、GHQ側から、性的「慰安」施設の増強を東京都に要求しており、需要が見込まれるため、出来るだけ早く開店したほうが商売上有利になると判断したのではないかということである。RAA側も営業所網を拡げて優位性を保ちたいという思惑はあったであろうし、こうしたところで両者の利害は一致したのではないかと推測される。

また、RAAは大倉財閥の創業者、大倉喜八郎の隅田川沿いにあった別邸を、進駐軍高級将校向けの施設として譲り受けているが²⁰⁾、日本無線は大倉財閥系企業である(大倉喜八郎の息子、喜七郎は日本無線の会長を務めている)。ここで、RAAと日本無線になんらかの接点が生まれたのではないだろうか。RAAから情報がもた

られ、女子寮の建物を活用するよう持ちかけられたか、あるいは三鷹商事としては、将来的に自らがキャバレー運営に乗り出すことを見越し、まずは運営を委託することで、経営のノウハウを RAA から吸収しようとしたのかもしれない。

タイミングを鑑みれば、RAA が 1946（昭和 21）年の 1 月にニューキャッスルの運営から撤退したのは、暴力沙汰などの度重なるトラブルによるだけでなく、当初から三鷹商事が正式に認可を受けた際には、直営に切り替える取り決めなどをしていたとも考えられる。いずれにせよ、同年 3 月には、GHQ が進駐軍兵士に対し性的「慰安」施設への立ち入りを全面的に禁止したことから、RAA と同様の運営方針はとれなくなり、三鷹商事の直営に切り替わってからは、性買売目的のない「健全な」キャバレーとしてリニューアルされたはずである。1946 年の初頭から実戦部隊の動員が解除されて復員していき、軍政部隊に要員が置き換えられていったことで、占領最初期の荒々しさも、徐々に柔らいでいったであろう。

1947（昭和 22）年 3 月に発行された三鷹商事の社内報『月報みたか』第 1 号には、「職場レポート（其の一）」として、キャバレー・ニューキャッスルの話題が掲載されている。それによると、「寒くなれば駄目だろうと懸念していたのも杞憂に終り、車はなく設備は十分でなくても連日平均百四五十名の若い兵隊さんでゴッタ返す大繁盛にまずまず一安心」とある。この頃、ニューキャッスルの経営は、ひとまず順調であったようだ。

しかし、この記事の執筆者＝ニューキャッスル従業員は、『此の頃は如何です？』と聞かれれば、『そうですね……スリルが、多すぎますね……』と答えている。進駐軍による「オフ・リミッツ（立入禁止）」を心配しているのである。設備面でスタンドの改装に着工したためオフ・リミッツの原因をひとつ除去したが、衛生面でトイレやホールの床など懸案は多いとし、「何しろイキのいい百十数名のガール」、即ちダンサーとして働く女性たちということになるのだろうが、「ガールの病気については憲兵隊の関心は強く、吾々も嚴重に警戒している」のだという。そして、「幸に成績は今のところ良好」であり、「進駐軍の意向方針をとく察知して誠意を以て善処する……平凡のようだが、これさえ出来れば五年が十年でも進駐軍のいる間は、この上もない良い職場として残ることは確実だ」と、この文章を締めている。

RAA の運営から、三鷹商事の直営に切り替えられたキャバレー・ニューキャッスルは、やはり 1946（昭和 21）年 3 月、GHQ が性的「慰安」施設へのオフ・リミッツを指令した後、（少なくとも表面上は）経営の「健全化」を図り、進駐軍向けキャバレーとして、GHQ の意向に沿う形で営業を継続したということになるだろう。

太宰治と玉川上水に身を投げて命を絶った山崎富栄は、1946（昭和 21）年の秋、塚本サキが経営するミタカ美容院で勤務することになり、鎌倉から三鷹に移ってきた。塚本は彼女の腕を見込んで、キャバレー・ニューキャッスル内に美容室を新設した。富栄は昼はミタカ美容院で、夜はキャバレーの美容室で働いた²¹⁾。若い女性が夜間美容師として働き、駅近くの自室まで帰宅していたわけだから、占領最初期の荒れた状況からキャバレー周辺の治安も多少の改善があったものと考えられる。

3.2 キャバレーとは何か

ここでは少々議論を一般化し、キャバレーの法的位置づけなどへと視野を拡張、キャバレーという施設について包括的な理解をするようにしていきたい。

3.2.1 法的な位置づけ

1946（昭和 21）年 6 月の警視庁令第 8 号「キャバレー、ダンスホール、ダンス教授所規則」は、「キャバレーとは、社交舞踏を為し得る施設に簡易な舞台及び飲食設備を併置して公衆に利用させるもの」、「ダンスホールとは他の法令によらず社交舞踏を為し得る施設を有し、公衆に利用させるもの」と規定している。同令は、昭和二十二年法律第七十二号（日本国憲法施行の際現に効力を有する命令の規定の効力等に関する法律）により 1947

年12月末日に失効する。その後改めて1948年7月に公布され、9月施行となった「風俗営業取締法」においては、第1条2で、風俗営業を「キャバレー、ダンスホールその他設備を設けてダンスをさせる営業」と定義している。さらに、「風俗営業取締法」を「風俗営業等取締法」と改めた1959（昭和34）年の第二次改正では、その第1条1で、キャバレーを「客にダンスをさせ、かつ、客席で客の接待をして客に飲食をさせる営業」とし、同条3でナイトクラブは「客にダンスをさせ、かつ、客に飲食をさせる営業（第一号に該当する営業を除く。）」、同条4でダンスホールは「客にダンスをさせる営業（第一号又は前号に該当する営業を除く。）」と定めている。すなわち、風営法においては、ダンスホールとしての機能に、客への接待と飲食のサービスを伴う営業形態がキャバレーであるとされたのである。大正末年から昭和初期にかけて一斉を風靡した、女性の給仕による接客サービスを伴うカフェやバーの要素にダンスホールを併せたものと言いかえることもできるかもしれない。

キャバレー・チェーン「ハリウッド」を展開し、昭和の時代に“キャバレー太郎”とも称された福富太郎は、次のように書いている。

「キャバレーというのは、風俗営業取締法にあるように、正式にはお客とホステスが踊れる踊り場がなくはいけない。だから、小さな店ではキャバレーの許可はおりない。十組が正式なダンスをぶつかり合わずに踊れるためには、踊り場はかなり広くなければならず、少なくとも二十〜三十坪は必要になる。また、ダンスをするためにバンドも入れるので、バンドステージもつくらなければならない、さらにショーもできるという社交場が、キャバレーといわれるのである。」（福富 2004: 17）

キャバレーにはダンスをするためのホールが必須であり、当初「風俗営業取締法」がキャバレーとダンスホールと一緒に定義していたように、キャバレーはダンスホールの延長線上にあるものとして捉えられていた²²⁾。そこで、主として永井良和『社交ダンスと日本人』（1991）に拠り、いったん時代を遡って日本におけるダンスホールの歴史を簡単に振り返っておくことにしよう。

3.2.2 戦前のダンスホール

日本で最初とされる営業ダンスホールは、横浜の鶴見にあった遊園地「花月園」内にオープンした。1920（大正9）年3月のことである。

カップル客が舞踏を楽しむ場としてスタートしたが、やがて米国発祥のタクシー・ダンスホールが日本にも波及した。これは、女性のダンサーを従業員として配置し、客の男性から料金をとって一緒にダンスをするというもので、1曲踊るごとにダンサーが客からチケットを受け取る「チケット制」が導入された。

こうして、もっぱら男性客を相手とするようになったダンスホールは、カフェなどの飲食店が営業を兼ねるようになった。これに対し、「女子従業員がいて酒類を提供する店舗で客にダンスをさせるという営業形態」は、「風紀上の問題」を起こすとされ、1924（大正13）年9月には、「通牒」により警視庁管内の飲食店でダンスが禁じられた。

昭和に入ると、赤坂の「フロリダ」のような絢爛豪華なホールが登場し、ジャズやタンゴのバンドを入れた、モダンで華やかな社交の場として人気を呼び、東京にはダンスホールが並び立つようになった。しかし、戦争が暗い影を投げかけた。日中戦争が始まった1937（昭和12）年にはダンスホール閉鎖の方針が発表され、業界の自粛により延期はされたが、1940年10月31日を最後に、全面閉鎖となった。

3.2.3 進駐軍向けとしての復活

敗戦直後、ダンスホールを復活させ、アルコール類などの提供を伴うキャバレーの看板を掲げたのが、RAAな

どである。RAA は政府の後押しを受け、銀座松坂屋の地下を改装した「オアシス・オブ・ギンザ」をはじめ、進駐軍向けのキャバレー・ダンスホールを展開した²³⁾。既述のとおり、RAA の性的「慰安」施設は、1946 (昭和 21) 年の 3 月にオフ・リミッツとなり、閉鎖や業態の変更をしたが、RAA は以後もキャバレー・ダンスホールなどについては営業を続行し、一部日本人向けとしても開放されている²⁴⁾。

3.3 進駐軍向けキャバレーの内部を垣間見る

三鷹商事の社内報第 1 号にはまた、岡枝と苗字のみの筆名で「言葉」と題する短かい随想が掲載されている。

『モシモシアノネ、アノネ、アノネ、モシモシ、アノネ、アーソウデスカ——サヨウナラ——』／左手を女の子の肩に、ジョッキーの右手を振り振り G. I. は合唱する。この歌は何とも言えずまだ二十二、三の若い兵隊に、はるかなる国にきた感傷と、遠い故郷へのホームシックをそそらせるものであるらしい。／曲は『ロンドン・ブリッジ』のあの懐かしいメロディーなのだ (中略) ／T と云うダンサーは、江戸っ子で歯切れのいい日本語を話していたが、『アイム、ハッピーよ』『ミー、ロンリーよ』とかうまい具合によを使ってなかなかの好評を博していた。／所詮言葉は意志の表現であるから必要に迫られて使うこんな種類の英語が、女学生の文法正確な英語より、言葉の出来の役割をより多く果すのであろう。」(三鷹商事 1947)

上記は、キャバレー・ニューキャッスル内部の様子が僅かながら垣間見える文章である。「ロンドン・ブリッジ」即ち「ロンドン橋落ちた」のメロディに日本語の単語を当てこんだ「モシ・モシ・アノネ」は、いわゆる「進駐軍ソング」と呼ばれる類の進駐軍兵士の間で流行った替え歌で²⁵⁾、岡枝は感傷云々と書いているが、GI が日本人の女性に声をかける時のワードとも関係していると考えられる。このニューキャッスルでの合唱に楽団の伴奏がついていたかは分からないが、この文章はキャバレーを構成する要素として、ジョッキ (ビール)、ダンサー、そして音楽があることを想起させてくれる²⁶⁾。

進駐軍向けキャバレーの内部の様子を伝える資料は、1945 (昭和 20) 年 9 月 19 日付けで通達されたプレスコード (報道統制＝GHQ による検閲) において、進駐軍将兵のフラタニゼーション (異性との親密な交際) に触れることもその対象となっていたためか、ほとんど見受けられない。三鷹商事の手書きの社内報である「月報みたか」ですら、検閲資料を保管したプラング文庫²⁷⁾ に収められていることから理解されるように、検閲の網は広く張られていた。

そこで、他所の様子を伝える文章を引くことで、進駐軍向けキャバレーの内部を覗き込むべく、傍証的に補っておきたい。まず採りあげるのは、カントリー歌手としてスターの座についた小坂一也の体験である。以下は 1950 (昭和 25) 年ごろ、アマチュア時代に巡りあわせた福生の進駐軍向けキャバレーの描写だ。

「彼女たちの、西洋の魔女にも紛う目の化粧、口紅やマニキュアの毒々しさ、動物性の香水の強烈さは例外なく完璧で、精力持てあまし気味の高校生にとっては、それがかえって好ましい。／そこへ、アメリカ兵たちの体臭や、英語でのざわめきなども重なりあって、ここも同じ日本の中だとは、とても信じられない。／GI も、三百人は入っているだろう、彼らとかわるがわるに踊っている日本人のダンサー (ホステス) にしたって、その半数はいたはずだ。／マンモスキャバレーとまではいえないが、当時のキャバレーとしてもこれはかなり大きな部類に入った。といっても、ボックスシートみたいなものは見当たらない。ただもうゴチャゴチャと、今のロックコンサートみたいに人がうごめいていた。場内がそれほど明るくはなかったせいもあって、これも初めて見たミラーボールがまわる下、白っぽい無地のドレスの女が多いのが目立つ。／立川から青梅線に乗りかえて駅で七つ、東京近郊では、“基地の街”として、現在でもまだ当時の面影をいちばん残していることで有

名な“福生”にあった。これが進駐軍専用キャバレー“ローズ・マードー”に初めて入ったときの光景である。」(小坂 1990 : 77-78)

むせ返るような雰囲気のもとで、「ここも同じ日本の中だとは、とても信じられない」と小坂はその強烈な印象を綴っている。

次は阿川弘之の『あひる飛びなさい』を挙げる。こちらは小説で、架空の町の進駐軍向けキャバレーが登場するが、阿川はこの作品を執筆するにあたり、1947(昭和22)年に名古屋で進駐軍向けキャバレー「赤玉会館」を立ち上げ成功を収めた山田泰吉²⁸⁾に取材し、モデルとしているので、それなりのリアリティはあると考え得る。

これは、進駐軍向けキャバレーの「内部」というより「内情」だが、「進駐軍専用のキャバレーは、当時、各米軍キャンプのスペシャル・サービス——娯楽施設課の監督下にあり、従業員たちに対して、月一回の検診があった」²⁹⁾(阿川 2017: 65)。また、「進駐軍専用の店で消費するビールは、米軍から出荷証明書を出してもらって、それを持って日本のビール会社へ買いに行くのである。／当時、税金抜き公定価格のビールと、町の、税込み闇価格のビールとの間には、相当魅力のある値段の開きがあった」³⁰⁾(同 : 86)。そして、1950(昭和25)年6月に朝鮮戦争が没発すると、「キャバレー『ミシシッピー』での、兵隊たちの『エンジョイ』の仕方も、いささか荒れ模様であった。／生きて、休暇をもらって、前線から日本へ帰って来た米兵たちは、／『朝鮮は地獄だ』／口を揃えてそう言った。」「些細なことに感謝し、泣かんばかりに喜ぶかと思うと、一方、些細なことから喧嘩口論をはじめ、乱暴を働く」(同 : 119-120)。三鷹のニューキャッスルは、1948年に営業を終えているが、戦場をくぐり抜けてきた兵士たちによって、再びこのような場の雰囲気は荒れた。三鷹商事の社内報記事執筆者が言うように、「五年が十年でも進駐軍のいる間は、この上もない良い職場として残ることは確実だ」というのは果たしてどうか、大いに疑問符がつくところである。

3.4 ダンサーとバンドマン

キャバレーがタクシー・ダンスホールの延長線上にあったからには、「キャバレーやダンスホールではいうまでもなくダンサーと音楽」(高橋一郎／佐々木守 1997: 220)は欠かせない。本節ではキャバレーに必要とされた「キャスト」としてのダンサーやバンドマンに目を向けるが、ここでもニューキャッスルについての資料不足は否めず、彼女／彼たちは、ほとんど不可視化されたと言えるような存在となっている。同時代の周辺にも着目しながら、整理を試みたい。

3.4.1 ダンサーという存在

太宰治の弟子、戸石泰一は戦後の三鷹での出来事として、次のような場面を書き留めている。

「駅前通りの屋台のおでん屋で、何人かはハミ出しながら賑やかにのんでいる時、彼は先からその店でおでんを食べていた二人連れの女性に、いきなり調子のよいことを話しかけ『ぼくは、太宰という小説家だけどね』などと言うのだった。これも昔、堤や私と飲んでいて大威張りし、その女給さんが知っているかどうかということになって『ぼくは太宰治という小説家なんだ』と言うと、誰もそんな名前を知ったものはおらず、抱腹絶倒したことがあったが、その時の調子とはいうまでもなく明らかにちがっていた。“進駐軍関係”のようにみえる女の人たちだが、そのうち太宰は、駅向うのアパートに帰るといって彼女たちを送ってゆくと、あつというまに居なくなってしまった。」(戸石 2020: 234)

この「“進駐軍関係”のようにみえる女の人たち」とは、当時の三鷹にあって、キャバレー・ニューキャッス

ルのダンサーのことを指しているものと推定される³¹⁾。三鷹では、「キャバレーに働く女性の姿は町のあちこちでみかけられ、町は二二年に彼女らにダンサー税付加税を課したほどであった」（三鷹市議会史編さん委員会編 1982 : 286）。ダンサー税付加税とは「ダンサー税は、キャバレー、ダンスホールにおいて、社交舞踏により客に接する業務に従事するダンサーに対し、定額によりこれを賦課する」と定めた都税に付加される市町村税で、このような税が課されるほどに「キャバレーに働く女性の姿は町のあちこちでみかけられ」たというのであるが、彼女たちの実際の表情は、三鷹においてはまったくと言っていいほど伝えられていない。当時からすれば、このような職業に対する偏見は強かつたであろうし、彼女たちは三鷹のコミュニティの外から働きに来るか、戸石が書いているように「駅向うのアパート」などに間借りしていたか、あるいはニューキャッスル内の寮に住み込みで働く「アウトサイダー」であったが故だろう。そこでここでも他所の記録を援用し、進駐軍向けキャバレーのダンサーなる存在を捉えてみたい。

広田和子は、戦時中、日本人「慰安婦」としてトラック島で働いた経験を持つという「菊丸さん」に取材して、その生涯に関する貴重な証言をまとめている。菊丸さんは戦後、「品川のダンスホールにダンサーとして働きはじめた。横浜と東京の中継地点にあたる品川駅付近は、進駐軍相手のキャバレー、ダンスホール、ホテル、旅館が建ち並び、国際色豊かな街となっていた」。菊丸さんは次のように語っている。

「あたしたちの行ったところも進駐軍相手だったんです。六十いくつの学習院を出たおばあちゃんが通訳でね。胸に菊の花をつけていました。五十嵐さんといってたわ。三十分早く行って、その人から英語を習うのよ。『ウエルカム・サー』と『リクリエーション・アンド・アミューズメント・アソシエーション』とかね、いまでも覚えているのはそれだけ。それからチケットとか、お金の計算の仕方とかを教わったわ」（広田 2009: 124-128）

やがて、この店では進駐軍の白人と黒人の兵隊でピストルの撃ち合いとなる喧嘩があり、彼女は嫌気がさして店を辞め、横浜の綱島に居を移して、パンパン宿の経営を始める。それに失敗すると闇マーケットの住み込みの仕事をするようになったという³²⁾。ダンサーであったのは、広田が「とにかく戦地から直接送られてきた将兵たちは気が荒く」と書く、戦後間もなくのことである（広田 2009: 124-128）。

ニューキャッスルの従業員が、前掲のとおり、「スリル」を感じていたのは、上記のような事件がいつ起こるか分からないということもあったかもしれない。一方、ダンサーの女性たちは、働き盛りの男性の多くが戦地で亡くなっていた戦後の社会で、こうした危険とも隣り合わせとなりながら、生活の糧を得ていた³³⁾。

ニューキャッスルを RAA が運営していた時に支店長だった既出の鍋木恵喜は、次のように書いている。

「当時のキャバレー、ダンスホールに於てのダンスは総べてチケット制で、一回踊る毎に十枚綴から一枚を切ってダンサーに渡すのであるが、二十一年十月から舞踏税が十割課税となって一枚三円の券が六円となった。然し現実にはダンサーに一回踊れば五、六枚ぐらい渡すのは通例で、中には二十枚三十枚渡す客も少なくなかった模様であった。ダンス熱は盛んで各会社の職場における舞踏会が催され、或る人はダンスホールのダンスと職場のダンスの二つの流れがあると評していた。」（鍋木 1976: 13）

チケット制のタクシー・ダンサーは、チケットにより稼ぎを得ていた。チケットを得ることが暮らしの手段であったのである。

1947（昭和 22）年 12 月発行の三鷹商事社内報『月報みたか』No.10 に掲載されている「営業所めぐり」の「N・C・³⁴⁾ 訪問」において、この記事の執筆者（H 小僧）は、「日本娘と日本ビールは三鷹でフジヤマよりナイスである。小さい体を小さくして昔は荒れた N・C・を思い出しながら事務所へ行く」。そして、S 支配人に「ガール

の良い相談相手になってやって下さいよ」と言うと、支配人は「勿論だよ」「泣くなよしよしってうたってやるよ」と応じている。実際、女性のダンサーたちが涙を流すような場面はあったのだろうか。また、そのような場面があったとしたら、どのような理由であっただろうか。今となっては、それらはまったく、地域の歴史の奥底に沈んでしまっているのである。

なお、鎗木が「職場のダンス」としているのは、男女同権など戦後の「自由」を謳歌するように、一般男女にも社交ダンスが流行したことを指している。ダンスホールは、闇商人などしか出入りできない贅沢な遊び場であったが、「いっぽうで社交ダンスを新しい娯楽として受け入れる世代も現われはじめ」娯楽の機会に恵まれなかった若者たちは、自由でまた手軽な男女交際の方法として社交ダンスに熱中した（永井 1991：176-177）。このような職場で気軽にダンスを楽しもうとする風潮が「職場ダンス」と呼ばれた。後で取り上げるが、三鷹商事が吉祥寺に井ノ頭ダンス学院を開業したのは、こうした流行が商売になると見込んでのものであろう。

3.4.2 バンドマンの「不在」

ダンサー以上に顔の見えないのが、キャバレー・ニューキャッスルで仕事をしていたバンドマンの存在で、まるで「不在」であったのではないかと思えるほどだ。

当時、進駐軍相手の仕事で、バンドマンは引く手数多だった。日本の戦後のジャズの幕開けとして、キャバレーやダンスホールも展開した RAA の役割がしばしば挙げられる。例えば、「戦後ジャズの出発にあたって、『RAA』の果たした役割りは決して小さくはないといえるのではないか。いいかえれば、『RAA』という組織があったからこそ戦後ジャズが約束されたのである」（高橋、佐々木 1997：215）といった具合だ。しかしながら、日本のジャズ史を扱った書籍や当時のジャズ雑誌を出来るだけ広く調査したが、三鷹の進駐軍向けキャバレーで演奏したというバンドマンの事例は見つけられなかった。

間接的ではあるが、唯一と言っている例外がショパン猪狩の回想である。ショパン猪狩は、ヘビ使いの扮装をした「東京コミックショウ」での活躍で知られた芸人で、この当時、長兄であるパン猪狩の一座でのドサ回りの仕事を離れ、吉祥寺で両親らと暮らしていた。その時同居していたひとつ上の兄、久四郎がドラムを叩くバンドマンであった。記述内容には、複数の事実誤認があり、その誤りの内容からこれがニューキャッスルのことを言っていると判断できる類のものではあるが、稀少な証言ではあるので、そのまま引用しておきたい。

「久四郎あにきもパンさんの劇団をはなれ、三鷹の、接收した学校を改造して作った、アメリカ軍のダンスホールのバンドに入ってドラムを叩いていた。俺も仕事が見つからず、あにきに付いて行って、バンドボーイとしてちょこまかと動き回り、なんやかやと手伝いをして、パンをもらって帰って来たことが何度かある。」（ショパン猪狩 1989: 140）³⁵⁾。

三鷹のキャバレー・ニューキャッスルにもやはり、バンドは出演していたのである。「場末」ではあっただろうから、その後、日本の音楽界で名をなす一流どころは来てなかったかもしれないが、それでは、どのようなバンドがダンスの伴奏をしていたのかというと、これもまったく不明となっている。

4 キャバレーと六・三制——校舎となったニューキャッスル

町立三鷹中学校（現・三鷹市立第一中学校）の初代校長を務めた末^{すえ}三郎^{さぶろう}は、「キャバレーを買収して発足した三鷹中学」と題する雑誌記事で次のように述べている。

「まず独立の校舎、独立の運動場、自分たちの自由に使うことのできる教便物、出るにも入るにも頭をさげないですむ生活、それは今のこの生徒たちのためばかりでなく後につづく子供たちの幸福のためだ。私たちは一刻も早く独立校舎を得ることにまず全力を注ぐことにした。／そして、町役場には日参した。町議会には必ず傍聴席に歩を運んだ。何々会合、何々催し、機会をつかんで校舎買収（キャバレー）促進を理解してもらうことにつとめた。トラックに乗って町中を飛びまわり校舎を建ててくださいと訴えた。三鷹駅前に立って行き交う町民各位にキャバレーを買収してくださいと訴えた。一月の寒風吹く中を生徒といっしょになって独立校舎を与えてくださいと歌いながら行進した。」（末 1950: 63）

本章では、いわゆる「六・三制」と戦後の学制改革について概要を整理し、キャバレー・ニューキャッスルという遊興の場が、新制中学校の校舎として買収されるに至る経緯を跡付けていきたい。

4.1 六・三制の誕生と市町村の受難

GHQ の占領目的は、日本の民主化・非軍事化にあったが、それを達成するために戦後改革が打ち出された。なかでも、1945（昭和 20）年 10 月にマッカーサーが発した、いわゆる五大改革指令³⁶⁾ にも見られるように、「教育の民主化」はその大きな柱であった。

1946（昭和 21）年 3 月には、米国から教育使節団が来日し、六・三制の導入が勧告された。日本の学校制度は、戦時期に尋常小学校から名称を変えていた国民学校初等科の上に、高等科や青年学校、旧制中学校、高等女学院、さらに高等学校や女子高等師範学校、大学などが複線式に乗る仕組みとなっていたが、これを小学校・中学校・高等学校・大学と、あらゆる人に開かれた「六・三・三・四」の単線型に改め、最初の「六・三」を義務教育化するというものである。1947 年 3 月には教育基本法と共に学校教育法が制定され、六・三制が採用された。その際、新たに義務教育課程として組み込まれた中学校は、新制中学校と呼ばれた。

この決定の齎寄せを受けたのが、新たな中学校の設置義務者となった市町村である。文部省教育施設部長であった田中徳治によると、新制中学校に必要とされる教室数の見積りが甘かったことなどにより、「新制中学校の第一年目は、新しい中学生のための教室建築については特別な措置をしないことで始められた」。それ故に、多くの教室が不足し、「中学校は独立中学校とするという閣議決定（二十二年二月二十六日）はありながら、全国大部分の中学校はとりあえず小学校と同居し過剰収容と二部授業は日常茶飯のこととなり、中には、三部授業、四部授業というように、ただ出席をとれば帰らすという学校や、青空教室、又は雨が降れば傘をさし授業をするという教室風景さえ見られるに至った」（田中 1950: 5-6）のである。

三鷹においても、新制中学校は独立校舎を持たず、三鷹第一小学校内に軒を借りる形で、ひとまずスタートを切った。初年度の生徒数は 759 名にも及び、小学校に収容しきれなかった 463 名は、当時三鷹にあった私立三多摩中学校に委託された（三鷹市教育史編纂委員会編・三鷹市教育センター編 1993）。三鷹では敗戦時、一時的に人口が減少したものの、引揚者や疎開先からの転入者が多く、人口は再び増加に転じた。それに伴い、中学校の学齢生徒数も増加し、独立校舎を得ることは、喫緊の課題であった。そこで白羽の矢を立てられたのが、キャバレー・ニューキャッスルの所在する物件である。

宍戸幸七の『三鷹の歴史』（2006: 242）によると、「町当局はこの建物に目をつけたのであるが、これを買収して中学校に改修するまでには一千万円の資金が必要とされた。しかし当時の三鷹町の財政事情はもとより、国や都の起債補助の見通しからして町民よりの寄付金に依存する以外に方法が考えられなかった。かくて二十二年十一月町議会にこの計画による寄付金募集の議案が上程された」。1948（昭和 23）年によりやくそれが議決されると、後に三鷹市長となる渡辺万助を会長に三鷹中学校建設期成会が結成されたが、集まった寄付金額は、結局 270 万円程度であった。当時の毎日新聞都下版は次のように報じている。

「町といっても財政面では立川市をしのぐ三鷹町は本年度当初予算七百十七万円が追加追加で一千百六十九万円となり、さらにまた追加しないとお台所が破産するという状態にさらされているが、同町の主なる事業としては武蔵川の工事、新制中学校舎にするためキャバレー・ニューキャッスルの買収、新警察署の新設などが（中略）、特にキャバレーの買収は一千二百四十万円の予算中一千万円を寄附金に頼って目下募集に大苦であるがここもまたお隣の武蔵野市同様千八百円ベースマンの多いところだけに一千万円集めるのはなかなかの骨で、これをなし遂げようとする役場吏員は率先して苦しい月給袋の底をはたき、また町当局は赤字の台所を少しでもやわらげようと町営病院設立を予想して買い込んでおいた大量の薬品（トラック約二台分）を十一万円で売り払うなどサラリーマン生活のような玉ねぎ生活を続けている。」（1948）。

ここでいう「千八百円ベース」とは、1947（昭和22）年5月に発足した社会党を首班とする片山哲内閣による、政府が実施した新物価体系（統制価格体系）の一環としての賃金水準（業種別平均賃金／工業総平均賃金）のことである。しかし、戦後のインフレによる物価の上昇に、賃金水準が見合わず批判の声があがった。このような賃金労働者が三鷹で比重を増したために、寄付金を集めることが難しくなっているということを上記の記事は指摘している。

こうした事態については、「寄附金に悩む三鷹町 新制中學建設費」と見出しを打った、当時のローカル紙「都下新聞」（株式会社三多摩時報社）が、次のように伝える。

「一般勤労者の生活は三鷹町で予算計上した昨夏の頃からみれば諸物価は更に騰貴し、懐具合は一段と苦しくなっている。三鷹町の全世帯は一万二千余そのうち農家及商店とみられるもの合せて凡そ千世帯、その他は戦時中華やかな軍需工場街の当時移住して来た勤労者が多く、それがため今回の寄附金が予定通りの成績を挙げ得られないのだということは一応うなずけられる。／隣村の神代村が同じ新制中学建設寄附金一世帯当り五百円に成功したのは、その寄附方法が極めて民主的であったとの評判があり又事実その効果のあったことは認められるが、しかし何んといっても同村は目下景気の良い農村であるからだと云えよう。／翻って担税力の強いと云われている武蔵野市は一世帯当り僅かに百三十余円の寄附募集が相当の日数を要していることは同市が勤労者都市の関係であろう。／今度の新制中学建設計画は何処の市町村でも財政上その住民に対し寄附行為はさけ得られないところであって住民も亦止むを得ないとして協力しているのである。その成績は全般的にみて農村がよく、純農村でない町村はその町村のうち農家或いは新興階級の家庭が率先寄附に応募しているところは悉く成功している」（1948）。

すなわち、農村共同体から近郊都市への進展が、地域の名望家が会長を務める期成会により、少なくない金額ではあるが、十分な寄付額を達成できなかったことに結びつくわけである。キャバレー買収は、近郊都市化に向かう地域社会の変化のあり方を、このような形においても反映しているのである。

4.2 キャバレー買収という希望

宋戸の前掲書によれば、三鷹中学では新校舎で1948（昭和23）年4月12日に入学式が挙行され、4月末より授業が開始されたという。こうして、三鷹商事の最初期の事業であった進駐軍向けキャバレーは終わりを告げた。新制中学校発足の翌年に、新米教師として三鷹中学校³⁷⁾に赴任したという松原新三郎は、次のように回想している。

「私が赴任したときには、すでに数百名の新一年生の入学式を挙げるができる講堂らしきものは存在し

ていた。ただ、この校舎らしきものの教室たるや、女子工員または戦後はダンサーが一部屋に何人かずつ寝泊りしていた居室の、二部屋の中間の押入れ部分を取り壊して、その二部屋をプチ抜いて一つの部屋にしたものだった。／まんなかには、押入れのときに必要だった六本の柱などがどの教室にもあって、後ろの方の座席からは教師の顔も黒板も見えづらく、子どもたちからは、よく苦情がでたものだった。(中略) 校舎にするためのキャバレー買収は簡単には進まなかったかもしれない。そこで、校舎を求めていることを子どもたちの声と行動でアピールしようという話になったようだ。／だれかがキャバレー買収促進の歌を創った。子どもたちが列を組み、要求を歌に掲げて、歌いながらデモ行進をする。歌をリードする楽器はトランペットもトロンボーンもなにもない。ただひとつ、リヤカーに積んだ太鼓があった。太鼓で音頭をとって、要求を歌いあげながら行進する。要求を全面にした子どもたちのデモ行進。しかも、それを教師たちが引率している。想像するだけでも楽しい。こうしたことが事実としてあったのだ。三鷹中学校の教師となった私は、その後、たくさんの子どもたちからその話を聞き、歌も教わった。／(中略) 最後、子どもたちから聞いたその歌の歌詞を、正確かどうかはわからないが、紹介しておく。歌の節も分かっているが、楽譜を書くようになっていないので、ここでは省略せざるをえない。／町立三鷹中学校は 僕らの学校よい学校 校舎がなくて困ってる／キャバレー買収いっときも 早くお願いします／町の四つの小学校 やがて揃って中学へ 良い子は迷って叫んでる／キャバレー買収いっときも 早くお願いします」(松原 2005: 195-198) ³⁸⁾

大人たちの思惑や打算の入り混じった進駐軍向けキャバレーという遊興施設の買収は、民主主義を謳った新たな学校制度のもとで学ぶ子どもたちにとっての「希望」であったのである。

5 映画館から割烹まで——三鷹商事による諸事業

三鷹商事の社内報「月報みたか」創刊号の「巻頭のことば」で、同社の実質的な責任者である岡枝健一は「三鷹商事の特異性は百花一時に開くが如く、緑あり紅あり営業種目の多様性は恐らく日本有数のものではなからうか」と述べている(三鷹商事 1947)。本章では、進駐軍向けキャバレー以外にも幅広く展開された三鷹商事の諸事業を概観する。

5.1 三鷹での事業

三鷹商事の本拠地は、言うまでもなく三鷹である。三鷹では進駐軍向けキャバレーを営業するだけでなく、文化事業に参入した。駅前に、映画館、書店、喫茶店、さらに雑誌の出版部が入る複合施設を新設したのである。ここは日本無線の所有物件ではなく、以前はマーケットであった建物を改装して間借りした。

雑誌『商店界』の1946(昭和21)年7月号に掲載されている「経営拝見」という記事で三鷹商事が取り上げられ、この文化に関わる一体的な経営構想に着目している。つまり、都心部が焼跡と化し、近郊沿線に分散した都市文化人を顧客としてこの地に繋ぎとめようという「小都市文化村の建設」を構想している点がユニークであるというのである。

5.1.1 映画館事業

映画館は「三鷹映画劇場」という名称で、三鷹最初の映画館である。開業時期については、ローカル紙『多摩タイムス』の記事(多摩タイムス社 1947)に唯一言及されているのを見い出すことができたのだが、1946(昭和21)年の2月となる。同記事には、開館の年の秋から洋画専門館に切り替えたことあり、それまでは邦画も上映していたものと推察される。定員は280名で、封切から日数の経った作品を上映する、「二番館」「三番館」な

どと称された劇場であった。映画は、火曜日から翌月曜日を 1 サイクルとして、週替わりで 1 本のメイン作品と、ニュース映画が併映された。

専門に上映していた洋画とは、セントラル・モーション・ピクチャー・エクスチェンジ（以下、セントラル映画社）が配給するアメリカ映画である。セントラル映画社は、GHQ との協力関係のもと、1946（昭和 21）年 2 月に設立された、アメリカ映画の統合的な配給会社で、ハリウッド・メジャー 8 社に 1 社を加えた 9 社の作品を等分に配給した。セントラル映画社は、日本市場でのシェア拡大を目指し、小劇場などにも配給の網を広げていった。三鷹映画劇場が洋画専門館となったのは、そのような動きが開始されたタイミングであった。セントラル映画社の提示する契約条件は厳しく、独立系の劇場に対しても 5 割の歩合が要求されたが、アメリカ映画の人気は高かった（谷川建司 2002）。

それらの映画は、「大衆」に娯楽を提供すると共に、米国が主導する戦後民主主義を喧伝する手段でもあった。現在の東村山市に開設された戦災浮浪児の保護・収容施設、萩山学園³⁹⁾に入所していた子どもたちの作文などを集めた『戦災孤児の記録』（田宮虎彦編 1971）には、遠足を兼ね徒歩で三鷹に映画を観に行った時のことを書いたものが含まれている。その際に鑑賞した作品は『少年の町』であった。これは米国のフラナガン神父が設立した問題児のための自立支援施設「少年の町」を描いたもので、フラナガン神父は 1947（昭和 22）年に来日も果たし注目の的となった。『戦災孤児の記録』の最初の発刊も 1947 年のことであるから、ここに登場する映画館とは三鷹映画劇場のことである。児童の 1 人は、映画を観に行った時のことを次のように書いている。

「映画館の中に入るとセンプー機がまわっていたので涼しそうでしたが、少したつものすごくこんできたので、とても暑くなってきました。一二時半にやっと映画がはじまりました。はじめに新世界ニュースをやりました。その次にアメリカニュースをやリ、いちばん最後に『少年の町』の映画を見ました。そのときぼくがかわいそうに思ったところも、またえらいなと思ったこともたくさんありました。そして少年の町では、みんな子どもたちでやっているの、ぼくたちも少年の町子どもたちに負けなように、一生懸命勉強し、えらい人になろうと誓いました。」（同書: 118）

このように、アメリカ映画は民主主義的教育のためにも役立てられたのである。三鷹映画劇場の営業は 1949（昭和 24）年、三鷹大映に取って代わられるが、その経緯については後で詳述する。同年発生した「三鷹事件」において、容疑者として 8 月 1 日に逮捕され、後に単独犯とされ死刑判決を受けることになる竹内景助が、逮捕の 3 日前に三鷹映画劇場で三鷹事件に関するニュース映画を観たと、公判で陳述している（法務府検務局 1951）。この事件について書いた歴史学者の小松良郎は、竹内の調書を引用しているが、このニュース映画を観た日に上映されていたのは、アメリカ映画『出獄』であったという（小松 2011: 180）。三鷹最初の映画館でありながら、この映画館について触れている資料は多くないが、このような形で歴史の片隅にその名を残している。

5.1.2 書店の経営

書店の名は三鷹書房で、三鷹映画劇場と同じ建物内であるから、開業も映画館と同時期と推測される。映画にしてもそうだが、戦争を終え、娯楽や情報に飢えていた人々は、映画館や書店に群がった。三鷹書房では、1947（昭和 22）年の 8 月から「三鷹書房入荷週報」という、手書きによる会員向けの販促物を発行しており、欠番はあるがプランゲ文庫に収蔵されている。この週報は読み物は多くないが、様々な情報を読み取ることができる。まず、書籍の品揃えについては、新入荷情報や書店員による短いレビューが掲載されており、海外や国内の文学、哲学、歴史、経済書など、近隣の知識層（前掲『商店界』の記事が言うところの「都市文化人」）を顧客として抱えていたことが窺える。また、後述する雑誌『新樹』の広告を見ると、新刊書だけでなく、古書も取り

扱っていたようだ。この週報には、4号より、三鷹映画劇場の上映作品の告知が掲載されており、当時の三鷹でどのような映画が上映されていたのかを知ることでもある。ここには高尚とされる作品だけでなく、ターザン映画など大衆受けする作品がラインナップされている。もっとも、上映作品の選定については、セントラル映画社がパッケージ売りして、契約上、劇場側に選択権はなかった可能性がある。

5.1.3 月刊誌の発刊

三鷹商事では、月刊の随筆誌『新樹』を1946（昭和21）年5月号として創刊し、三鷹書房内に出版部が設けられた。単行本の出版も企図していたようだが、こちらは実現しなかった。中央線沿線に住む文化人のグループである新樹会を創立し、その会長は評論家・作家の新居格が務めた⁴⁰⁾。創刊号の編集後記を執筆しているのは、寄稿者でもある作家の武野藤介で、彼が編集の中心となった（紅野敏郎他 1977: 101）。随筆を中心に、詩や短歌、さらに毎号座談会形式の記事を掲載しており、その第一回は吉祥寺を拠点とする劇団、前進座の面々を迎え、武野藤介や三鷹商事の中心人物、岡枝健一らが顔を揃えている。表紙絵は、創刊号から第3号まで東郷青児（創刊号と第2号は同じ絵柄）、他にも野田九浦、1947年の新年号には中川一政といった著名画家を擁しており、力の入りようが伝わってくる。発行兼編集人として名を連ねる富山文雄という人物は、後に『雪の宿』という小説を発表しており、その著者紹介を見ると、大正11年（＝1922年）生まれとあるから、雑誌発行時には20歳台半ばの若さであった。その後は、埼玉県で歯科医院を開業していることが、『埼玉年鑑』などの記述から分かる。執筆陣は、武野藤介や新居格の他、加藤武雄、外村繁、平山蘆江、細田源吉、上林暁らがあり、当時三鷹に居住していた著名作家として、武者小路実篤の名はあるが、太宰治は関わりを持たなかったようだ。

雑誌は第5号となる9月号までは月刊のペースで発行されていたが、第6号は10・11月の合併号となり、定価がそれまでの3円から一気に4円50銭へと値上げされている。次の第2巻第1号は新年号となり、奥付には12月号が休刊となったことについてお詫びが掲載されている。さらにその次の第2巻第2号は、武者小路実篤の随筆「柿の葉一つ」が巻頭を飾っているが、4月号として2ヵ月飛ばされており、定価が10円に跳ね上がっている。しかも、表紙絵にクレジットされている坂井孝は、三鷹商事の幹部社員（ニューキャッスルの支配人も務めた）と同名で、恐らく同一人物だろう。この号は、プランゲ文庫に収蔵されているものの、実際に流通したかは不明である。いずれにせよ、全7号で雑誌は休刊となった。休刊の理由には、用紙不足を挙げている。この年の4月、新聞出版用紙割当委員会は、割当以外の用紙使用を禁じるなど、非常措置を声明する事態となっており、文化運動を志しての雑誌発刊であったが、出版界をめぐる種々の困難に打ち克つことはできなかった。

5.1.4 東京大学井之頭寮

三鷹商事は、進駐軍向けキャバレー同様、正式な認可を受ける以前の1945（昭和20）年に、東京大学に対し三鷹にある日本無線の技術教習寮を学生寮として貸し出すという申し入れをしている。これは同大学OBの岡枝健一が、戦後、東京の住宅や食糧事情から、学生が東京に戻ってこれず困っていると知ったことをきっかけとしている。個人的なスタンドプレーといってしまうまでも、この申し入れは朝日新聞の記事（1945.10.30）で美談的に取り上げられた。

学生寮の確保に窮していた大学側もこの申し入れを歓迎し、これが戦後の東大学生寮の第1号施設⁴¹⁾となった。施設は登記上、こちらも日本無線の所有となっていたようであり、日本無線の寮時代から食事を提供していた賄い人も、日本無線が給料を支払う形で、そのまま引き継がれた。岡枝は、寮の1周年記念祭に、キャバレー用に仕入れていたものと思われるビールなどを提供したりと、商売優先というよりは、母校に対する思い入れがあったようだ（東京大学学生部編 1961）。

日本無線の労働組合からは、この寮の明け渡し要求も争議の際になされたが、1948（昭和23）年暮れに、東大

が日本無線から施設を買上げ、間借り状態ではない国立大学施設となった。この寮は、当時の建物のまま 2006（平成 18）年まで寮施設として存続し、現在、跡地はマンションとなっている。

5.1.5 他の事業

上記以外にも、映画館及び書店と同一建物内での「喫茶みたか」の経営、「三鷹書房入荷週報」や『新樹』の広告を参照すると、不動産や火災保険の代理店、都心部の劇場のチケット販売など、できることはなんでもというように多岐に亘る事業が手掛けられていた。

5.2 三鷹以外での事業

雑誌『新樹』創刊号の表 3 には、三鷹商事の自社広告が掲載されていて、三鷹での映画館・書店・喫茶店事業の他に、吉祥寺の劇場と割烹、荻窪の旅館が宣伝されている。こうした中央線沿線の他、日本無線の工場疎開地であった長野には三鷹商事の支店が設けられた。三鷹から少し離れることになるが、本節では、三鷹商事の三鷹以外での事業を概観する。

5.2.1 井ノ頭公園劇場

三鷹に開業した映画館や書店と共に、三鷹商事による文化事業として推し進められたのがこの演劇用の劇場である。前掲『商店界』の記事によれば、工員用の自転車置場を転用したとのことで、場所は日本無線社史編集室より提供いただいた資料の住所に照らし合わせると、現在吉祥寺マルイのある井ノ頭通りのマルイに向かって左側の土地である。ここは後に映画館のスバル座ができ、現在は吉祥寺スバルビルとなっている。

劇場といっても土間に長椅子を並べただけの粗末な施設であったようだが、『新樹』創刊号の座談会の主役である前進座は、ここを地元ファン向けの公演で利用した。前進座は、1931（昭和 6）年に創立され、歌舞伎の流れを汲みながら独自の活動を展開した劇団で、1937 年に吉祥寺の井ノ頭公園近くに団員が集団で移転して劇団の拠点とし、コミュニケーションのような集団生活を営んだ。戦後はシェークスピア劇なども演じ、仇討などが持て囃される歌舞伎の演目には否定的であった GHQ の支持を取り付けた。1949 年には、日本共産党に集団入党して話題を呼んだ。

前進座の中心人物のひとり、中村翫右衛門は『劇団五十年——わたしの前進座史』で「公園劇場はいまの吉祥寺駅南口の前にあって、その後も、全国巡演の出しものなどでしばしば公演して地元のファンに喜ばれたものであった」と、回顧している（中村 1980:287-288）。とはいえ、収益性は乏しかったのか、三鷹商事の関連する各種印刷物の記載内容から判断する限り、1947（昭和 22）年中には閉館されたものと推測される。

5.2.2 井ノ頭ダンス学院

公園劇場に成り代わるかのように、恐らく 1947（昭和 22）年の前半までに設立されたのが、このダンス学院である。キャバレーのところでも触れたが、戦後には一般の日本人にもダンスの流行があり、そうした流れを見込んで設立されたものと考えられる。このダンス学院は、現在の吉祥寺マルイが立地する敷地内（北西側）に立地した。前進座は、こちらでも地元向け公演を開催したようで、雑誌『レポート』の無署名記事「ルポルタージュ 前進座」には次のようにある。

「詰めれば八百人ははいるという、ダンス学院のホールは、その八百人をはるかにこえる観客でふくれかえった。フロアに荒むしろをしきつめ、客は、ゲタをぬいだ素足の甲に、むしろのアミ目を赤くにじませながら、楽団の演奏席に向って首をのばす。そこが、舞台なのである。／赤ん坊をおぶった商店のおかみさん、サラ

リーマンの細君、八百やのおじさん、都電の運転手、男女学生、腕白小僧。呼びごえ、さけびごえ、笑いごえ、セキ、クシャミ、世間ばなし……ここ、八十坪の空間には、『庶民』の日常生活の騒音が、そのままムキ出しに解放されて、場内は、つまり喧騒のルツボだった。」(時事通信社編 1949b: 8)

上記の記述から、ダンス教習所ではあるが、バンドステージのある大きなホールを備えた施設であったことが分かる。このダンス学院は、三鷹商事が手を引いた後も経営が引き継がれて存続した。写真集『吉祥寺消えた街角』(土屋恂写真・安田知代編 2011: 92-93)に掲載されている1965(昭和40)年の写真には、この学院の看板が写りこんでいる⁴²⁾。ダンス学院の経営を引き継いだのは、清水商事の清水徳太郎で、この人物は「月報みたか」で、三鷹商事の社員として吉祥寺の施設を担当していたことが確認できる。桑原才介の『吉祥寺横丁の逆襲』(2011: 105)によれば、清水徳太郎は「明治二十三年創業の埼玉・大宮公園の料亭『清水園』(現ラフォーレ清水園)の経営者の長男だった人で、もともと料亭経営の何たるかを熟知していた」とのことである。三鷹商事では、そのような経歴からこの人物を雇い入れ、吉祥寺の施設を任せていたものと推察される。

吉祥寺では現在の藤村学園の北側に、日本無線の社員寮を転用し、料亭双葉⁴³⁾を開業したが、こちらも清水徳太郎が経営を引き継いだ。なお、清水商事は、現在の吉祥寺マルイの敷地に、ダンス学院を呑めるように造成された広い面積を持つ料亭(後に結婚式場)、清鳳閣を1950年代に入ってから開業している。

5.2.3 その他の地域での事業

中央線沿線では、荻窪に旅館として西郊ロッジングや三松荘を営んだ。このうち、西郊ロッジングは建物が現存し、文化庁の登録有形文化財に指定されている。下宿屋として1930年代に建てられたもので、戦時期に接収され、日本無線が社員用に用いていたものを三鷹商事が転用したが、その後返還された。

東京の外では、鎌倉で海の家を開業した他、長野には支店が設けられ、旅館やアパート、洗濯場の経営、長野駅と善光寺を結ぶ中央通りでは食品などを扱う「三鷹」という名の店舗を営んだりした。

6 揺れる町議会——三鷹映画劇場の買収・売却問題

1949(昭和24)年6月7日に招集された三鷹町議会第3回定例会において、三鷹映画劇場を買収及び売却する案が一括審議された。閉会時間は夜も遅く午後8時55分となったが、両案の審議は閉会間際の僅か数分間で、瞬く間に議決された。

これについては後日疑義が呈せられ、地方自治法の規定(昭和二十二年法律第六十七号第百一条の3及び4)により、議員定数の4分の1以上の要請に基いて、6月19日に三鷹町議会第4回臨時会が開かれた。

本章では、三鷹映画劇場の買収・売却問題について、当時の議会議事録⁴⁴⁾をもとに、その顛末を見ていく。しかしながら、それは少なからず錯綜していて、当時、現在進行形で推移する事態を掌握し得る立場にあった議員たちの議論からは、議員間で共有されていたであろう事実関係がしばしば省略されており、議事録だけで絡み合う綾をすっかり解きほぐすことは難しい。そこでここでは、議事にある細部や枝葉の議論にまでは深く立ち入らず、背景となる部分を押さえた上で、問題の基本的な構図を読み解いていきたい。

6.1 背景としての入場税

映画館の買収・売却が議会で取り上げられたのは、税金の滞納問題に拠る。当時、映画館などには高率の入場税が課されており、経営を圧迫した。そのことが、映画館の買収・売却問題を導いたのである。

入場税の導入は戦時期の1938(昭和13)年に遡る。日中戦争の本格化により、増大する戦費を賄うため「支

那事変特別税法」により設けられた入場税の税率は、当初 10%であった。1940 年には独立の「入場税法」が定められ、「1945 年 4 月には入場料 1 円以上のものに対して 200%の税が課されるまでになった」(宮崎刀史紀 2003: 89-97)。

入場税は戦後も撤廃されずに存続した。1947 (昭和 22) 年 4 月に税率は、免税点を 1 円とし、100%へと改められたが、同年 12 月、150% (免税点 3 円) に再び引き上げられた。

1948 (昭和 23) 年 8 月、入場税は国税から地方税に移譲された。税率は変わらず 150%で、都道府県には本税として 50%、市町村には付加税として 100%が配分された。GHQ は、占領目的である日本の民主化・非軍事化を達成するにあたり、戦争を主導した中央集権体制に対する地方自治の確立を督励したが^{4 5)}、その一環として、人口 5000 人以上の市町村を対象に自治体警察の設置が定められた^{4 6)}。入場税は、この自治体警察を賄う財源に充てられたのだ。

映画館などに高率の入場税が課せられる一方、1949 (昭和 24) 年に、いわゆるドッジ・ラインが実施されると、それまでの激しいインフレから、「超均衡予算」による緊縮財政の不況の波が一気に押し寄せた。1950 年版の『映画年鑑』によると、「それまでの興行インフレも、四九年度正月景気を最後に興行は急カーブに下向線(ママ)を辿り、デフレ様相の深刻化とともに十五割という高率税はさらに大きい業界の桎梏となった」(時事通信社編 1949a: 8)。三鷹映画劇場の買収・売却問題が浮上したのは、このようなタイミングだったのである。

税制に関するシャウプ勧告の後押しがあり、1950 (昭和 25) 年に入場税の税率は 100%となった。また、地方税法が改められて、付加税が廃され、入場税は都道府県税に割り振られた。映画雑誌『映画世界』は、1951 年の 5 月 1 日号で「映画と税金」という特集を組んでいるが、その記事の中で取材を受けた、入場税を取り扱う都の担当者は、映画館が差押えに至るプロセスについて、次のように語っている。

「大体入場税は、その月の分を翌月の十五日までに納めていただくので、それを過ぎると一日について、百円につき四銭(日歩四銭)の延滞利子がつくんです。更に翌月の十五日を過ぎても納めて来ない場合には、つぎの十五日以内に督促状を出し、その督促状の着いた時から三十日以内に納めて貰うようにするのです。それでも更に納めない場合は、四十日の日限を与えて強制的に執行手段をとるわけです。」(映画世界社編 1951: 21)。

入場税において、納税義務者は入場者又は利用者であり、経営者等は特別徴収義務者にあたるが、経営者にしてみれば、一旦入場料として懐に入ったものを運転資金などに回してしまうと、滞納が雪だるま式に膨らんでしまうのである。こうして 1950 年度の終わりには、税率は下がったものの、地方都市においても強硬徴収旋風が吹き荒れたのであるという。

6.2 映画館買収・売却問題の構図

三鷹町議会第 3 回定例会及び第 4 回臨時会の議事録から見てくる、映画館買収・売却問題の基本的な構図は以下のようなものである。

三鷹映画劇場は多額の税の滞納を抱え込んでいた。三鷹町に対する滞納額は概算 180 万円であったが、他に国税の滞納 50 万円程があり、税務署に映写機や原動機が差押えられていた。三鷹町としては、差押え資産が売却されると、国税分を引いた売却の残額は滞納分に遠く及ばないことが見込まれるため、6 月 10 日予定の競売が実施される前に映画館を買受け、その上で独自に売却する方針を固めた。それを議会に諮ったのが第 3 回定例会である。売主と買主の間で直接取引できないのか、との声も挙がったが、吉田賢三郎町長の答弁によると、町が間に入る条件で買ってもらえるということになっているから、それでは駄目なのであるという。

映画館の買収額は、三鷹町の滞納分を相殺する 180 万円であったが、国税の滞納分 50 万円を町が肩代わりす

るため、その分の足が出た。国税滞納分の肩代わりは、映写機など備品の競売により映画館としての営業が継続できなくなることを防ぐための処置であったものと思われる。

一方、売却については東宝に打診したが不調に終わり、次に交渉した大映では 130 万円なら買うとの回答があったが、仲介料は発生しないし、町のためにもなるのだからと説得して、150 万円まで引上げた。しかし、30 万円の損益が生じ、町の赤字は併せて 80 万円となった。にもかかわらず、議決を経て契約が交わされ、大映側からは内金として 50 万円が支払われた。

これに対し、事務手続上の諸々の瑕疵が指摘されると共に、住民からの声も受け、なにより町の財政的欠損が疑問視された。この問題は、総務常任委員会に一任され、結果、町長と議長、売買に携わった篠原議員とで、急ぎ買収額の増額を大映側の責任者である鶴田孫兵衛に要請する運びとなった。

6.3 大映と鶴田孫兵衛

大映は戦時中の 1942（昭和 17）年に、映画会社の統合・再編（いわゆる「映画新体制」）により、新興キネマと大都映画、さらに日活の製作部門が合併し、設立された。1943 年には、文藝春秋社の創立者であり作家の菊池寛を社長に迎えている。

1905（明治 38）年茨城県生まれの鶴田孫兵衛は、大都映画の撮影所長を経て、大映立ち上げの際の発起人の 1 人に名を連ね、東京撮影所長に就任する。戦後も撮影所長を務め、取締役の要職にあったが、1947 年 12 月、他の 4 重役と共に公職追放の憂き目をみた。

直営館を手放していた大映は、戦後、自社作品を上映する契約館の獲得に尽力した。その際、年間を通じて自社作品を配給する「全プロ契約」（全番組を賄うブロック・ブッキング制）の専門館獲得も企図され、「1950 年 5 月に大映の契約館は 1,046 館（うち全プロ館 943、ブッキング 3 本以下館 103）に増大していた」（井上雅雄 2013）。

三鷹大映劇場（後、三鷹大映）は、大映の名を冠してはいるが、大映の専門館というわけではなく、『三鷹市市勢要覧 昭和 25 年版』（三鷹市役所 1950）掲載の広告には、「大映・東映・東宝特選上映館」との文言が見られる。当初、運営は新映興業という会社が担い、『映画年鑑』の記述を追うと、新映興業以降も経営者欄に鶴田孫兵衛個人の名は見受けられない。鶴田は実質上のオーナーではあったろうが、公職追放中であり、追放は 1950（昭和 25）年 10 月に解除されたが、解除後の 1954 年には大映が新たに立ち上げた大映興行に入り、1958 年になると大映本社に復帰しており、三鷹大映の経営は、名目上、人を介していたものと推測される。

6.4 適法か違法か

6 月 22 日に、三鷹町議会の第五回臨時会が開催され、交渉の結果が報告された。

前回の臨時会の翌日、鶴田孫兵衛に町の苦境を伝えたところ、譲り渡しから 1 年が経過した後に、1 年間をかけて、町の赤字分の半額となる 40 万円を補填するとの結論に達した。買取額については、議決を経ており、上乘せには断じて応じられないとのことであった。結果を議会に諮るため、正式な契約については 3 日延期し、6 月 24 日としてもらった。

一方、残りの 40 万円について、三鷹映画劇場を経営する三鷹商事に談判すると、倉庫として使用している物件を町で売却してもらい、それが 50 万円程と見積もられるから、残金 10 万円は三鷹商事がいただきたいとの回答を得た。

これには当然ながら、異論が出た。また、本来は公売に付されるべき差押え物件を、その前に税金滞納分との相殺という形で町が買取したことをはじめ、手続き上の瑕疵を問題視する意見が、改めて沸き起こった。町長の答弁によれば、大映側が内金として支払った 50 万円の中から三鷹商事に現金が渡され、映画館の買取・売却の議決を急ぐ理由であった、公売予定日の 6 月 10 日より後の 21 日に、ようやく国税滞納分を完納したというの

である。こうした事柄について違法か適法か、専門的な意見を聞き、どのように処置するかを決める特別調査委員会が新たに設置されることとなった。

6月28日の第6回臨時会において、調査委員会からその後の経過説明があり、前回の臨時会後に開かれた調査委員会で、税務課長より、国税滞納分の完納は7日に済んでおり、領収書もあるとの修正がなされ、それを受けて国税庁に赴き意見を聞いた結果、完納されれば差押えは解除となり、売買契約を交わすのは違法でないとの結論が出された。そのため7日の議決を覆すわけにはいかなかったが、80万円の欠損は許容しがたく、引き続き買取金額の上乗せなど、赤字額の穴埋めするために交渉委員会を立ち上げるという方向性が示された。

こうした経緯もあり、大映への経営の受け渡しは、すんなりとはいかなかったようである。というのも、先述のとおり竹内景助が映画を観たと陳述している7月28日の時点では、まだ三鷹映画劇場のままであったからだ。

この問題は、住民にも知られ、ある議員は、納税意欲に関わると言われたと発言している。「三鷹事件」で、暴走した電車が突っ込んだ家屋の主人の証言として、直後にその家に駆けつけた事件の容疑者の顔を見知っていたのは、映画館の問題で町長が不正をしたなどと、駅前で訴えている姿を見ていたからだという主旨の理由が述べられており（法務府検務局 1950: 119）、多くの住民がこの問題を知ることになっていたものと想像される。議会では、戦後に導入された公選制による最初の町長として、あまりに誠意を欠くなどと、厳しい意見も表明された。

不正が行われたのかどうかは、議事録を読むだけではなんとも言えない。そうでなくとも、映画業界の有力者に対する配慮や、町の代表的な企業である日本無線を母体とした三鷹商事との馴れ合いのようなものは、あってもおかしくないだろう。とはいえ、性急な議決がなされたのは、入場税収入を生み出す映画館の経営が継続的に行われるように、焦りがあったということではないだろうか。売買を仲介した篠原議員は、議会で次のような発言をしている（句読点を追加した他、文意の変わらぬ範囲で、一部修正した）。

「私は好んで中間に入ったのではない。町で直接経営するというのはまずいということであり、向こうが買った値で相殺すれば、一日も休まず、継続されるので、徴税には損害がないと言われ、それには良い買い手を探さねばならないということにより、私は幸か不幸か会社に知人がおり、話を通じて見ることにしたのである。」

6.5 尾を引いた問題

しかしながら、経営が移行した後も、問題は尾を引いた。

1952（昭和27）年3月24日の議会では、大映側が追加補填を約束し、1951年6月7日までに支払うとされた40万円が、未入金であることについて質問されている。市長には渡辺万助が就任しており、40万円が追加で支払われることになった事情はよく知らないが、支払い期限日になり催告を出したところ、鶴田孫兵衛の代理人として映画館の常務取締役という人物がやって来て、映画館の引き渡しの際にトラブルがあり、損害を被ったのは売り渡したそちらの瑕疵であるのだから、損害金を市で負担してほしいと談判をされたとのことであった。

続いて、同年7月5日の議会で、市長は未払いの40万円について、契約上有効な債権だが、相手方の主張もある程度は頷けると答弁している。結局、損害分として20万円を減額し、残りの20万円については、同年10月末から5ヵ月にわけ4万円ずつ支払いをするという、ある種政治的な決着が図られた。

ところが、2ヵ月分となる8万円の支払いが滞り、1954（昭和29）年3月12日の議会で、未払い分についての質問があり、さらに翌年度末になっても状況は変わらず、同年3月31日の議会で再び質問された。これに対する財務課長の答弁は、前年度末に先方の言い分を聞くと、都による入場税の強制的な取立てが再開され、三鷹大映もその対象となっているため、他の債務については後回しにする以外に処置のしようがないということで、なんとかしたいとの意志は確認したが、その後も埒があかず、交渉代理人ではなく8月に鶴田孫兵衛の自宅を訪

れ直談判すると、立派な人物で、その話は初耳だが、すぐ手配すると返事があったものの、履行されずに督促を重ねているとのことであった。

いささか長くなったが、以上が議事録から読み取れる、映画館買収・売却問題の概要である。

とはいえ、こうした問題を抱えながらも、三鷹において映画館という娯楽＝文化産業の命脈は保たれ、三鷹大映は、大映本体が倒産した 1971（昭和 46）年に三鷹東映、1977 年には洋画 3 本立ての名画座、三鷹オスカーへと看板を掛けかえつつ存続した。一時は 3 館にまで増えた三鷹の映画館の最後の 1 館として営業を続けていたオスカーが、駅前再開発に伴い幕を下ろしたのは、消費税の導入により入場税が廃止となった翌年、1990（平成 2）年 12 月のことである⁴⁷⁾。

7 三鷹商事の黄昏——事業清算を巡る推論

ここまで見てきたように、幅広く営利活動を展開した三鷹商事が、いつごろ、どのように事業を清算したのかは、資料が見出せず、はっきりしたことは分かっていない。しかしながら、進駐軍向けキャバレーの運営に踏み切った経緯と同様に、いくらかの推論をすることはできる。

まず、目玉事業のひとつと言える映画館について、多額の税金滞納を抱えて経営から手を引かざるをえなくなっており、三鷹商事の業績事態が良好な状態にあったとは言い難い。他にもすでに、出版や進駐軍向けキャバレー事業を断念していた。

次に、親会社にあたる日本無線の状況である。日本無線は敗戦後、全生産を一旦停止し、民需企業への転換を図った。三鷹本社工場は 1945（昭和 20）年 10 月 28 日に GHQ に対して生産再開の許可申請を出し、12 月 11 日に一部品目の許可がおりた。一方、GHQ は民主化推進の一環として、農地改革や教育制度の改革などと並び、財閥解体を掲げ、その方針を示したが、日本無線も対象に含まれた。まず、1945 年 11 月 24 日公布の日本政府による勅令、会社ノ解散ノ制限等ノ件（制限会社令）により、翌年 3 月には制限会社の指定を受けて財産の処分などが自由にできなくなった。映画館の買収・売却問題に関する議事録の中で、前章では取り上げていない箇所、三鷹商事に提供された倉庫の建物が、登記上は日本無線の名義となっていたとの発言が出てくるが、このように財産の移動が制限されていたことによるものだろう。

追って、同年 12 月には持株会社整理委員会から持株会社に指定され、保有株式の譲渡を余儀なくされた。三鷹商事との資本上の関係も順次解消されていったものと思われる。

こうした措置に対し、戦時補償の実質的打ち切りへの救済策として会社経理応急処置法が公布された。これにより日本無線は特別経理会社となり、1946 年 8 月 11 日をもって一旦事業年度を打ち切って、同日から 1949 年 8 月 31 日までを 1 営業期間とし、再建に乗り出すこととなった。

1948（昭和 23）年 2 月には過度経済力集中排除法の適用対象にもなり、同年 12 月に指定取消しとはなったが、日本無線の経営状態は改善されず、遊休資産の売却によって従業員給与などを賄うような有り様であった。1949 年 2 月からのドッジ・ラインによる緊縮財政下での経済情勢の急変もあり、収益性を重視した生産体制の見直しへと舵を切った。企業再建整備計画が認可されたのを受けて、1949 年の 10 月 1 日には、三鷹、長野、上田、諏訪の 4 工場を独立させて第二会社とし、従来の日本無線は、旧日本無線株式会社として解散した（日本無線編 1971）。再建案では三鷹本社工場から 594 名を整理するとの発表があり、組合が烈しく抵抗したが実行された。恐らく、この日本無線再編の折に、日本無線を後ろ楯とした三鷹商事の事業も清算されたものと思われる。先述した「竹内陳述」によれば、7 月 28 日の段階ではまだ三鷹映画劇場として営業を続けていたことになるため、8 月から 9 月末にかけて清算されたということになるのでないだろうか。

傍証として、三鷹商事の長野支店は、同年 7 月に分離し、長野の地で株式会社三鷹という社名で独立している

ので（信濃毎日新聞社編 1952: 252）、この時点ですでに清算は規定路線であったとも考えられる。

三鷹商事の中心人物であった岡枝健一は、1952（昭和 27）年に中野で出版社、住吉書店を立ち上げている⁴⁸⁾。この時までには、三鷹商事を畳んで日本無線からも離れ、出版業に転じたということになるだろう。三鷹商事が創刊した雑誌『新樹』の執筆者のひとりであった平山蘆江の著作を扱う出版社として創業されたが、平山が 1953 年に亡くなり、他の著者の単行本を出版したり、雑誌『花柳界』の版元にもなった。PR を兼ねた小型冊子『住吉だより』の第 1 号には、岡枝自身の原稿で、自身が計画した、中央線文人の集う「随筆雑誌」に関することに触れ、その縁で平山蘆江と知己を持ったとあり、『住吉だより』には『新樹』の発行兼編集人と同名の富山文雄の寄稿もあるから、三鷹商事と住吉書店の岡枝健一が同一人物であることに、まず間違いないだろう。

8 戦後の「メリイクリスマス」——太宰治と三鷹商事の諸施設とを結ぶ細い糸

1945（昭和 20）年の 4 月 2 日に三鷹を襲った空襲の爆撃を受け、太宰治は、先に妻子が疎開していた、妻の実家がある甲府に移った。甲府でも空襲に遭うと、今度は自身の故郷である青森県の金木を疎開地とした。戦後、太宰が金木から三鷹に帰還したのは、1946 年 11 月半ばである。三鷹の留守宅を守っていた弟子の小山清は、太宰の帰還により北海道へ旅立つことになった前日の晩、太宰と「三鷹の映画館で一緒に映画を見た」のだと、「風貌—太宰治のこと—」というエッセイに書き残している（小山 1997: 57）。この映画館とは、時期的に三鷹映画劇場のことだろう。

本章では、太宰治の帰京後第一作となる短編小説「メリイクリスマス」（1947）に埋め込まれた、三鷹映画劇場をはじめとする三鷹商事の商業施設の僅かな痕跡を探ると共に、この作品に瞬間的に登場する「アメリカの兵隊」が体现する「風景」についても考えてみたい。

8.1 「メリイクリスマス」と三鷹書房

作中に明記はされていないが、「メリイクリスマス」は、太宰が三鷹で巡りあった出来事を下敷きにしている。小説の語り手である「私」は、旧知の若い女性「シズエ子ちゃん」と邂逅する。その邂逅の場が書店であり、書店にはいる前に、「私は東京郊外の或る映画館、（というよりは、活動小屋と言ったほうがぴったりするくらいの可愛らしくお粗末な小屋なのであるが）その映画館にはいって、アメリカの写真を見て」いたと記されている。シズエ子ちゃんのモデルである林聖子は、後日この際の出来事について、次のように記している。

「二十一年十一月初めの日曜日、私は駅前の三鷹書店を覗いた。有馬生馬さんが父のことを書いたという『ロゴス』を買おうと思ったのである。夕方の店内は、活字に飢えた人たちで一杯だった。店の人に『ロゴス』の所在を聞くため、一步踏み出そうとしたとき、レジを離れようとしている男の人と向き合う形となった。私は魔法をかけられたようになった。『太宰さんの小父さん』といいかけて、あわてて『小父さん』の言葉を呑み込んだ。」（林 2012: 229-230）

林は、「メリイクリスマス」に描かれている実際上の出来事について、インタビューや対談、座談会などでも、繰り返し述べている。例えば、「猪瀬直樹『ピカレスク』始動スペシャル特別座談会」という『週刊ポスト』の 1999（平成 11）年 9 月 17 日号に掲載された座談会には、次のようにある。「私たち親子は戦災に遭って、かろうじて三鷹の日本無線の寮だったところに住まわせてもらってたんですが、太宰さんが三鷹にお帰りになっているなんて知りませんでした。ところが昭和 21 年 10 月頃のこと、駅前の三鷹書房という書店で太宰さんとばったりお会いして」⁴⁹⁾。また、『太宰治に聞く』所収のインタビュー（井上ひさし・こまつ座編著 2022: 200）には

「時は昭和二十一年十一月初めの日曜日。場所は三鷹駅前の『三鷹書店』。実際には太宰さんはお弟子さんの小山清さんとご一緒でしたが、そのことはこの作品には書かれていません」とあり、『東京人』2008年12月増刊号の特集「三鷹に生きた太宰治」掲載の森まゆみによるインタビューでは「翌昭和二十一年の十一月初め、私は三鷹駅前の書店で、太宰さんとバッタリ出会ったんです」、朝日新聞の連載記事「太宰治と私 没後 60 年」の2008年6月4日の第1回でも「昭和21年の11月初め、三鷹駅前の書店で3年ぶりぐらいに再会した時のことを書いてらっしゃる」と語っている。

日付が10月ごろや11月初めとなっているが、太宰の帰京は11月の中旬だから、小説の記述にあるとおり「十二月のはじめ」の誤りだろう。山内祥史はこのことを指摘した上で、「『日曜日』という林聖子さんの記憶が正しければ、林聖子さんと太宰治とが三鷹書店で出逢ったのは、十二月一日ということになろう」（山内 1996: 194-197）としている。書店名についても、「三鷹書店」や「三鷹駅前の書店」と揺れがあるが、これらを時間の経過により「三鷹の書店」などと言い慣らしていたもののヴァリエーションと見做せば、「三鷹書房」が正解であると考えられる。

8.2 「メリイクリスマス」と三鷹映画劇場

石川巧は「メリイクリスマス」に関する論文（石川 2007）の注で、「林聖子の証言から、作者・太宰治が『東京郊外の或る映画館』と記しているのは三鷹書房周辺の映画館を想定していると推察できるが（中略）、この作品内世界の時間軸と照らし合わせると、『私』が入った映画館として考えられるのは三鷹映画劇場ということになる」と指摘している。筆者も石川のこの説には、同意するところである。

別所直樹は、太宰と映画を観た時のエピソードとして、「暮れやすい冬の陽もまだ落ちず、ぼくたちは駅前通りをぶらぶら歩き、三鷹映画劇場に入った。ディートリッヒの『天使』を上映していた」（別所 1964）と書き、さらに同じ日のことを、別の文章でも「太宰と共に三鷹映画劇場でディートリッヒ主演の『天使』を見たことがある。太宰はものなれた様子で暗い場内にずんずん入って行く。そして、かなり前方、画面に向かって右側の方の席に坐った」（別所 1974）と書き残している。太宰は実際、三鷹映画劇場に足を運んでいたのだ。

石川はまた、前掲論文の別の注で、作中で語り手がシズエ子ちゃんに語って聞かせる、鑑賞してきたばかりの「サアカスの綱渡りの映画」との内容が、実在する映画のストーリーであるかを問い、「三鷹映画劇場およびその周辺で上映された映画については同時代の新聞広告や映画関係の雑誌を中心に調査したが、現在のところ明らかになっていない」としているが、この時期の三鷹映画劇場の上映作品は、週刊のローカル紙『多摩タイムス』に広告が掲載されている。残念ながら、12月3日から16日の2週間に上映された作品は、プランゲ文庫で『多摩タイムス』が欠番になっているため不明だが、上述した山内の説を採り、太宰と林が出会ったのは12月1日だったとすれば、その日の三鷹映画劇場の上映作品はチャールズ・コーヴィン主演の米映画『ルパン登場』である。『最後の抱擁』『肉體と幻想』『潜水艦 SOS』『ゴールデンボーイ』『追憶』『運命の饗宴』といった、その週の前後の上映作品を、『アメリカ映画と占領政策』掲載の「戦後公開アメリカ映画作品リスト（1946年2月～12月）」（谷川 2002: 289-290）と照らし合わせると、三鷹映画劇場では、封切日から1～6ヵ月程度経過した作品と、戦前に輸入済の作品も交えて上映していたようである。上記リストによれば、『ルパン登場』の封切は5月16日、別所直樹と観た『天使』は、戦前に輸入済だが未公開となっていた作品で封切は7月4日となっている。悉皆調査ができていないわけではないので、「メリイクリスマス」で言及される映画の内容が太宰の創作ではないとも言い切ることはできないが、石川が言及しているように、「サアカスの綱渡りの映画」というのは創作の可能性が極めて高いのではないかと推察される。

8.3 「メリイクリスマス」とキャバレー・ニューキャッスル

物語（太宰 1947）の結末近く、「私」と「シズエ子ちゃん」は、駅の近くの盛り場にある屋台のうなぎ屋で、うなぎの小串をアテに酒を飲んでいる。店の奥の紳士は酔って「まるっきりセンスの無い冗談を言い」、「私は日本の酔客のユウモア感覚の欠如に、（中略）にこりともせず酒を飲み、屋台の傍をとおり師走ちかい人の流れを、ぼんやり見ているばかり」である。すると紳士は、「私と同様にしばらく屋台の外の人流れを眺め、だしぬけに大声で」、「ハロー、メリイ、クリスマアス。」と叫ぶ。そこには、「アメリカの兵士が歩いてい」た。そして「私は紳士のその諧ぎやくにだけは噴き出し」てしまうのである。しかし、作品内の時間軸では夜の8時近くであろう、師走ちかい東京郊外の駅付近を、この「アメリカ兵」はどういうわけで歩いていたのか。これが三鷹の出来事であるなら、兵隊は進駐軍向けキャバレー・ニューキャッスルに行くか、そこから戻ってくる途中であったと考えてみることもできるのではないだろうか。

9 むすび

以上、進駐軍向けキャバレーと、それを経営した三鷹商事という会社の様々な事業活動を通じ、三鷹の戦後占領期を改めて振り返ってきた。戦時期からの急激な人口の増加による近郊都市化に、敗戦と占領という未曾有の事態を加え、この時期の三鷹は、安藤宏の言う「第三の転換期」を迎えていた。その具体的な様相を本稿では、進駐軍向けキャバレーという特異な施設を足がかりに明らかにすることを試みた。

悲惨な戦争への反省を促すものとして、戦時の体験が能動的に語り継がれる⁵⁰⁾のに比べると、戦後占領期が語られる機会は多くない。また、いわゆる戦争遺産はあっても、戦後占領期を想起させるものは、その多くが保存の対象とはならず視界から消え去っている⁵¹⁾。三鷹市立第一中学校の前を通りがかった住民が、かつてそこが進駐軍向けのキャバレーであったことなど、今となっては想像もできないかもしれない。

戦争の悲惨さは終戦により文字どおり終わりを告げるわけではなく、戦後占領期へと形を変えて連続していく。戦後80年を経て、この時期を体験的に知る人は一段と少なくなっているだろうが、「新しい戦後」を迎えないために、改めてこの時期の歴史にも目を向けておく必要があると考える。

ところで、太宰治は、1944（昭和19）年の短編「東京だより」を、次のように書き起こしている。

「東京は、いま、働く少女で一ぱいです。朝夕、工場の行き帰り、少女たちは二列縦隊に並んで産業戦士の歌を合唱しながら東京の街を行進します。」⁵²⁾

他方、戦時期の有名なスパイ事件であるゾルゲ事件の首謀者の1人、尾崎秀実の異母弟である著述家の尾崎秀樹は、戦後の一時期、旧中島飛行機の工員寮を転用したアパートで暮らした。そこはキャバレー・ニューキャッスルのあった場所の近くだったのだが、ある時、尾崎は自身の参加する文化サークルが催すことになった、三鷹中学の講堂を舞台とする前進座のシェークスピア劇『真夏の夜の夢』の公演を手伝った。自身の体験を綴った『生きているユダ』⁵³⁾のなかで、尾崎はその時のことを想像を交えて回想している。少し長くなるが、中略を入れつつ引用したい。

「ぼくのアパートから畑一つへだてた中学校で開かれたので、手伝いに行った。（中略）／前売切符は予定の半分しかさばけていない。しかしふたをあけてみると予想外に多くの人が集まった。村芝居でも見る気なのか、座布団をかかえてくる年寄たちもいる。その手は節くれだって、土の色に似ている。近くのお百姓さんたちだろう。（中略）この建物ははじめてから中学校として建ったのではない。とくにこの講堂は。……ペンキの

けばけばしいホールが畑の中に建てられたのは、ぼくがまだ三鷹に來ない前、アメリカ軍が進駐して間もない頃だった。……建物ができると、大型トラックが GI を運んできた。そのホールは占領軍の慰安所——日本政府公認の人肉市場だったのだ。百姓たちの耳に戦争中の行進曲や軍国歌謡にかわって、気狂いじみたルンバやジルバの騒音がとびこんできた。それだけではなかった。GI たちの暴力行為が町の人々を恐怖に追いこんだ。

（中略）あれからまもなく GI の姿が消えた。しかしかれらは思わぬ落としものを残していった。風呂へ行く途中で、ぼくは金髪の可愛い女の子をよく見かけた。気をつけてみると、青い目の赤ん坊や皮膚の色の違う子供にもぶつかる。（中略）……あの皮膚の色の違う子の母たちは、戦争中、この町工場で航空機の部品をつくるために挺身した娘だったかもしれない。……／考えこんでいたぼくはどっと笑う観客の声に、窓から舞台を見た。いたずらもののパックが、『うわきな恋草』の花の雫を誤ってライサンダーにたらしめたために、とんでもない悲喜劇が起こったのだ。妖精の王はディミトリアスにも惚れ薬をたらす。笑い声がさざめいている。……あの米軍施設のホールは中学の講堂になった。その講堂で前進座の公演が行われ、人々がルンバやマンボのかわりに、織屋のボトムや、大工のクインスの笑いと融けあっている。」（尾崎 1956: 216-218）

尾崎の見たという混血の子どもの母親が、果たして太宰が描いたような、戦時期に産業戦士のごとく働いた少女の 1 人であり、なおかつ戦後に進駐軍向けキャバレーと関わりがあったのかどうかということは、もちろんまったく判らない。とはいえ、戦時期の軍需企業的女子寮から戦後は進駐軍向けキャバレーに転用され、さらに新制中学校の校舎として買い取られることになったこの建物は、戦時から戦後にかけて急速に近郊都市化し、市制に移行するまでの混沌とした三鷹の変容の歴史／物語を映し出す「舞台」でもあったのである。

〔注〕

- 1) この後は、ガストーブを中野の物品交換所でようやく受け付けてもらったが、捨て値しかつかず、通知が届いて売れたと知ると、急に惜しくなり、買い戻したい気分になられたという流れの話である。蛇足ながら、誌面中、記事のタイトルは「いづこ」、目次のタイトルと記事本文では「いずこ」と表記されている。
- 2) 「敗戦」を「終戦」と言い換えたように、「進駐軍」は「占領」という言葉を避けた言い換えであり、実態は「占領軍」、実質的にはほぼ「米軍」と同義だが、本稿では原則的に、慣用的な「進駐軍」という呼び方を用いる。なお、GI (Government issue) の略語とする他、語源については諸説あり) は米兵の俗称である。
- 3) この研究はもともと、地域史研究を通して、三鷹の地域資料の取り扱いに関する現状や課題を検証するということからスタートした。途中で地域史研究そのものに的を絞ることにしたが、今後機会があれば、改めて地域資料の調査・研究にも取り組みたい。
- 4) 三鷹高校は、1949 年に町立で新設、校舎を三鷹中学校内に置いた。55 年に都に移管して都立三鷹高校となり、2010 年からは中高一貫の都立三鷹中等教育学校となっている。
- 5) 今回、日本無線株式会社の社史編纂室に、三鷹商事に関する資料の有無を照会したが、ほぼ皆無とのことであった。
- 6) 太宰は 1940 (昭和 15) 年発表の『鴉』において、比喩的に「やはり私は辻音楽師だ。ぶざまでも、私は私のヴァイオリンを続けて奏するより他はないのかも知れぬ。」と書き記している。
- 7) 鈴木芳行は、1922 (大正 11) 年の立川飛行場開設を嚆矢として防空軍事施設と航空機産業が集積した多摩地域を「〈空都〉多摩」と呼んでいる。『首都防空網と〈空都〉多摩』、2012 (吉川弘文館) 参照。
- 8) 日本無線の社史『日本無線 55 年の歩み』には、次のようにある。「前線に出動する将兵の数は日増しに増加の一途を辿り、国内の労務需給は次第に逼迫して、各企業にとって労働力不足は最大の支障となった。当社は労務部を新設して人員の確保に努めたが、労務者を確保する上の不可欠の条件は、先ず労務者用住宅の整備にあった。そこで、当社は政府から住宅設備資金の融資を受け、必要な施設を整備して、労務者の受入体制に万全の措置を採った」(日本無線

1971: 56)。

- 9) 坂は、鹿児島県警察部長時代、海軍航空隊基地のあった鹿屋に「慰安」施設としてのダンスホールを設置した（藤目ゆき「坂信弥―鹿屋に占領軍「慰安」施設の原型をつくった内務官僚」『アジア現代女性史 第十二号』、2018:018:60-68）。また、小岩にあった東京パレス（インターナショナル・パレスあるいはインターナショナル・ハウスとも）は、進駐軍兵士のオフ・リミッツ後は、日本人客相手に営業を続けた性買売施設だが、ここを事業家の原田源之助に世話したのも坂と言われる（ドウス 1979）。米国人ジャーナリストのマーク・ゲインや作家の坂口安吾、吉行淳之介らがここを訪れ文章を書いている。錦糸町の工場で軍需物資を作っていた精工舎の女子寮を転用したニューキャッスルと似たような来歴の施設であったが、原田が私娼街のあった亀戸の業者を会員として集め、店子にしていたという。
- 10) 小説（乃南アサ『水曜日の凱歌』）や漫画（山田参助『あれよ星屑』）、少し時代は古くなるが戦後の性買売施設を舞台にした 1960 年の映画『につぼんばらだいす』のような創作作品にも、RAA が題材や素材として用いられたものがある。
- 11) 三鷹の進駐軍向けキャバレーについても、ある時期まではそれなりに記憶され、市史などの記述に残されてきたのだと考えられるが、今ではほぼ忘れられ、残された記録も少ないがために、その実態を知る機会が失われてきたと言える。
- 12) マッカーサーをトップとする連合国最高司令官総司令部（GHQ/SCAP）を指すが、ここでは一般化した通称として「GHQ」との表記を用いる。
- 13) 当時の東京都の渉外担当で、後に社会学者となり、本文で引用した『東京百年史』の執筆陣の一人にもなっている磯村英一も、この要求に応じる役割を果たしたことを最晩年の著書『終戦五十年の秘話』、1995（明石書店）で告白している。
- 14) 竹村民郎「売春防止法」（朝日ジャーナル編『女の戦後史Ⅱ 昭和 30 年代』所収）、1985（朝日新聞社）によれば、「（一九五一年）七月二二日武蔵野市第一小学校で、八丁特飲街の廃業をもとめて、武蔵野市特飲街撤廃期生連盟の発会式がひらかれた。（中略）会長には松前重義が選出され、実行委員としては横河電機労組青年婦人対策部、日本無線労組、日本キリスト教婦人矯風会武蔵野支部、佐田信子、実川博など三団体一八人を決定した。撤廃期生連盟の発起人には市内在住の丹羽文雄、亀井勝一郎らの知識人も名を連ねていた」という。
- 15) RAA そのものは、進駐軍向け性的「慰安」施設の閉鎖後も組織が消滅したわけではなく、銀座にあったオアシス・オブ・ギンザをはじめとするキャバレー（進駐軍向けであったものを日本人にも開放していった）などの営業を継続する。1949 年に株式会社化して日本観光企業株式会社を名乗ったものの、乱脈経営が祟って行き詰まり、あえなくその事業は頓挫した。
- 16) ここで鐺木は、「芸妓」を「娼妓」の意味で用いている。
- 17) RAA 時代のエピソードにはこの他にも、橋本（1958:230-238）にニューキャッスル開店直後の事件として、交番勤務の巡査が進駐軍兵士から受けた受難のエピソードが具体的に記されている。同じ話は、小林・村瀬（1961:48-52）にも掲載されているが、細部が異なっており、いずれも出典が示されてなく真偽は不明である。恐らく、関係者の間で「噂」として広まったような類の出来事であるかと思われる。
- 18) 持株会社整理委員会調査部第二課編『日本財閥とその解体』、1951（持株会社整理委員会）に掲載された表によれば、1946（昭和 21）年末時点での日本無線の三鷹商事に対する親会社持株率は、75%となっている。
- 19) ドウス（1979:94）において、RAA が「キャバレー慰安所『ニューキャッスル』を十月十七日、土地の業者へ委託経営している」と書かれているが、これは明らかに逆で、RAA が土地の業者たる三鷹商事から運営を委託されたのである。
- 20) 向島の大倉別邸を RAA が進駐軍高級将校のための慰安施設としたことは、読売報知新聞が 1945（昭和 20）年 10 月 1 日朝刊において、「墨堤の名園開く／古典美豊かな大倉邸を慰安所に」との見出しで報じている。曰く「この別邸は建物の瀟洒に加へて本式の日本庭園を持ち、さらに隅田川に臨んでいるので、日本の古典美を米将校に満喫させるのに

は理想的だとして特殊慰安施設協会が手に入れて近く開設するもの」。なお、この建物（蔵春閣）は、千葉県の船橋市を経て、現在は太倉喜八郎の生まれ故郷である新潟県の新発田市に移築され、2023（令和5）年より一般公開されている。

- 21) 山崎富栄が主任を務め、その助手であったのが富栄を太宰に紹介した今野貞子である。
- 22) 松本侑子は山崎富栄の生涯を描いた小説『恋の蜩―山崎富栄と太宰治―』、2009（光文社）で、「進駐軍のダンスホール兼キャバレー「ニュー・キャッスル」と書いているが、この時代のキャバレーがダンスホール機能を備えていることを考慮すれば、「ダンスホール兼キャバレー」は同語反復的で違和感の残る表現である。
- 23) 作家の高見順による1945（昭和20）年11月10日の日記には、こうある。「夜の銀座はアメリカ兵だけしかいない。街燈がつかず真暗だ。真暗ななかをジープの光りが交錯している。松坂屋の隣りの地下室の、進駐軍だけのためのダンス・ホールというのは、もう開かれていて、明るい入口にアメリカ兵が賑やかに出入りしている」。また、同年11月14日の日記では、「松坂屋の横の地下室に特殊慰安施設協会のキャバレーがあるのだ」とも書かれている。やはり、ダンスホールとキャバレーは渾然一体として理解されていたようである（『敗戦日記』、2005（中公文庫）参照）。
- 24) オアシス・オブ・ギンザには、若き日の渡辺貞夫も一介の楽団員として出演していたことがある。「渡辺曰く銀座の松坂屋の地下に『オアシス』というダンスホールがあって、ピアニストの徳山陽さん（流行歌手・徳山玉璽^{（ママ）}さんの息子さん）のグループに入って、こちらは昼の仕事でした。両方ともクラリネットで、『ファンタジア』では月に一万二千元もらったのを覚えています。『オアシス』は確か五千元だったと思います。」（高橋／佐々木 1997: 17）
- 25) この曲は、フランキー堺など日本のバンドマンが参加したジョニー・ワトソン指揮・編曲の楽団が1951（昭和26）年に録音しているほか、三木鶏郎が手がけたNHK ラジオの番組『歌の新聞』とその後番組『日曜娯楽版』の中の「冗談音楽」に「モシ・モシ・アノネ」という言葉のフレーズを活かしたテーマ曲として用いられ、日本人にも馴染みとなった。
- 26) 「進駐軍ソング」というタームの名付け親である音楽評論家の中村とうようは、『ニッポンに歌が流れる』、1999（ミュージック・マガジン）で、「これらの音楽は、忘れられた歴史の一幕を記録する資料として貴重であるだけでなく、音楽そのものとして独自の魅力を備えている。それを支えるのは、初めて見たアジアの一角で異文化に出会ったアメリカ兵たちの新鮮な驚きの率直な表現だ」と書いている。
- 27) 「プランゲ文庫は、米国メリーランド大学図書館が所蔵する、戦後占領期に連合国最高司令官総司令部（GHQ/SCAP）による検閲を受けた出版物と文書類のコレクションである」（国立国会図書館 HP より）。特に、1945（昭和20）年から1949年に日本で出版された印刷物をほぼすべて網羅しているとされ、その多くがマイクロフィルム化されており、国立国会図書館憲政資料室で研究目的のための閲覧が可能となっている（一部デジタル化もされている）。本稿においては、プランゲ文庫所蔵資料から、三鷹商事の社内報『月報みたか』や書店の販促用印刷物『三鷹書房入荷週報』、三鷹書房発行の随筆誌『新樹』の全号、多摩地域のローカル紙『多摩タイムス』や『都下新聞』などを国立国会図書館憲政資料室にて閲覧・複写した。
- 28) 山田はその後、1961年にオリンピック景気を当て込んで東京に進出し、赤坂に豪華施設「レストラン・シアター・ミカド」を開業したが、失敗に終わった。ノンフィクション作家の沢木耕太郎は、山師的な事業に手を染めた晩年の山田に取材を試みた時のことを『馬車は走る』、1986（文藝春秋）の中のひとつの章「帝」に書いている。
- 29) 東京都観光協会の『首都東京大観』、1959によれば「アメリカ軍は兵士の健康を護るために、進駐早々『公衆衛生対策』と『花柳病対策』を指令した。（中略）また業者の健康診断と健康管理はむろん、占領軍専用のキャバレーやダンスホールの従業員から邦人向きのダンサーに至るまで週期検診をした。」
- 30) 『ビールと日本人』（麒麟麦酒株式会社社史編纂委員会編 1983）によれば、「進駐軍の部隊用ビールは昭和二十年十月以来ビール税が免除されていた」。また、『ビールの事典：楽しさ一番、みんなで乾杯!』（三省堂編 1984）掲載の「ビール普及年表」によれば「（昭和20年）10月 大蔵省主税局長池田勇人は、各財務局長宛に進駐軍部隊用の酒類には酒

税を免除するよう通牒を出した」。

- 31) あるいは、「パンパン」と呼ばれた進駐軍兵士相手の街娼のことを念頭においているかもしれないが、当時の三鷹においては進駐軍向けキャバレーの従業員を指していると考えて差し支えないだろう。
- 32) それからさらに先、彼女が故郷の釧路から 1966（昭和 41）年に再上京した際、最初、三鷹にちょっとしたことがあったという（広田 2009: 151）。
- 33) 吉見義明『焼跡からのデモクラシー（下）』、2024（岩波現代文庫）には、日本人客向けのダンスホールで働いていたダンサーの証言が紹介されているが、それによると「彼女の一九四七年八月の稼ぎは合計一七〇〇円だったが、稼いだお金は、自分の暮らしに必要な少額をのぞいて、ほとんど母に渡し、そのお金で母と弟は暮らすことができた。病弱な母はそのお金で主に配給の食料などを買い、彼女の所には、うどん・小麦粉・野菜などを届けていた」。
- 34) 「N・C・」は言うまでもなく「ニューキャッスル」の略。
- 35) ショパン猪狩はこの後、パン猪狩、妹の猪狩定子との 3 人で、進駐軍基地などを回る芸人に復帰する。ボクシングの動きを入れた芸風であったが、進駐軍関係者から米国のプロレスの情報を教わり、これを芸に取り入れた。そして、定子の他に女子プロレスラーを育成して、女子プロレスの興行を目論んだ。1952（昭和 27）年に、パン猪狩は三鷹の大沢に自宅を建て、その 1 階にリングを設けプロレスの道場とした。団体を立ち上げ女子プロレスの興行は人気となった。ショーの要素の強い興行であったが、力道山が日本で大々的なプロレス興行を成功させる前である。猪狩定子は、日本初の女子プロレスラーとされるが、こうした経緯から三鷹を日本の女子プロレス発祥の地と言うこともできるだろう。滝大作『ショパン猪狩の裏街道中膝栗毛』、1986（白水社）、亀井好恵『女子プロレス民俗誌——物語のはじまり』、2000（雄山閣）、青木深『進駐軍を笑わせろ！——米軍慰問の演芸史』、2022（平凡社）他参照。
- 36) マッカーサーは、1945（昭和 20）年 10 月、新任の挨拶で訪れた幣原喜重郎首相に、婦人解放、労働組合結成奨励、学校教育民主化、秘密審問司法制度撤廃、経済機構民主化の五大改革を指令した。
- 37) 三鷹中学では、敗戦時の陸軍大臣として割腹自殺する、三鷹に自宅のあった阿南惟幾の長男で、後に防衛大学教授となる阿南惟敬も一時期教鞭に立った。
- 38) 松原は、「私はある因縁から、このキャバレーにボーイとして、わずか一週間ほどだったと思うが、深夜から明け方まで働いていた経験をもっていた。この建物を女子寮としていた日本無線は、戦争中に私の在籍した中学校生徒の勤労働員先となり、私もそこで働かされた経験をもつ」とも回想している。
- 39) 現在の井の頭公園内にあった「東京市養育院井之頭学校」が移転した不良児等の教護施設に隣接して設置された。
- 40) 新居格（1888-1951）は、戦後、1947 年（昭和 22 年）に杉並区長選に出馬し、初代公選区長となった。区長時代のことを綴った『区長日記』（『杉並区長日記 地方自治の先駆者・新居格』として 2017 年に虹霓社より再刊）は、当時の東京西郊の地方政治風土がうかがい知れる、興味深い内容となっている。また、『三鷹市議会史』に「二一年九月、牟礼在住の武者小路実篤を中心に『新樹会』が作られた」とあるが、誤りと思われる。
- 41) 解体前の東大井之頭寮の外観や内部の貴重な画像を、写真家・関健一氏のサイトで観ることができる。<http://www.seki-photo.com/japan-keikan/j-a/inokasira/index.html>（2025.7.18 閲覧）
- 42) 吉祥寺マルイが、井ノ頭通りの少し西側から現在地に移ったのは 1978（昭和 53）年のことである。
- 43) 桑原才介は、『双葉』の建物は一九二四（大正十三）年、関東大震災の後、清元の初代・延寿太夫が造った稽古場だったもの。大正モダニズムが随所に見られる洋館と、日本建築の持つ様式美が一体となった建物で、その静謐なたたずまいは近寄りたがいほど立派なものだった」としているが、初代・延寿太夫とあるのは、吉祥寺に住居を建てた 4 代目栄寿太夫の誤りだろう。4 代目栄寿太夫は 1939 年に早逝しており、戦時期に日本無線が従業員用として接収あるいは供与により手に入れた物件を、戦後料亭に転用したものと考えられる。
- 44) 三鷹町議会や 1950 年代の市議会の会議録は現在一般公開されてなく、情報公開請求により取得した。
- 45) 新憲法と同日の 1947 年 5 月 3 日に、地方自治法が施行された。

- 46) 自治体警察は、全国を網羅する国家地方警察（国警）と並立される形で設置されたが、1954（昭和 29）年の警察法改正により消滅した。
- 47) 鶴田孫兵衛の長男、啓次郎は 1960（昭和 35）年ごろ、三鷹大映の経営をする太陽興業に加わり、親子間で映画館経営は継承されていくが、オスカー閉館後に受けた、『グラフみたか VOL.12』、1999（三鷹市企画部広報課編）の特集記事「MITAKA STATION いつもそこに駅があった」の中のインタビューで、次のように語っている。「平成 2 年に再開業事業をきっかけに閉館したときも、大勢のファンの人が来てくれて長蛇の列でね。取り壊すんだからというので、壁や床や扉に絵や字を描きまくって大騒ぎだった。扉を記念に持ち帰った人もいました。にぎやかで楽しくて、あのときがうちのオープンみたいだった。寂しくなかったですよ。／ただ、映画館が三鷹駅前になくなってしまったことは、街の活性化にはマイナスだと思います。名画座があれば自然に若い人が集まり、『三鷹』の魅力にもなっていくはずですよ。」
- 48) 出版総合誌『出版ニュース』の 1952（昭和 27）年 7 月中旬号に「住吉書店＝創業して四ヶ月」との記述が見られる。
- 49) 親子とは林聖子とその母親・富子のこと。太宰はもともと、母親の富子と懇意にしていた。なお、父親は画家の林俊衛で、富子と別居後、1945 年に亡くなっている。
- 50) 三鷹での取り組みとしては、三鷹戦時下の記録編集委員会・三鷹市総務部市長室市民相談担当編『いま語り伝えたいこと ―三鷹戦時下の体験―』（1986 年／復刻版 2005 年）の出版や、Web サイト「みたかデジタル平和資料館」などが挙げられる。前記書籍は、同サイトで PDF 版をダウンロードできる。
- 51) であるからこそ逆に、戦後の闇市に由来するとされる吉祥寺のハモニカ横丁のような場所が珍重され、人気スポット化したとも言える。
- 52) 牛田守彦・高柳昌久『戦争の記憶を武蔵野にたずねて 増補版』、2006（ぶんしん出版）には次のようにある。「日本無線の徴用工や動員学徒を含む従業員は、地方工場を除き一三、三〇〇名に達したといひます。太平洋戦争中は毎朝、吉祥寺駅から脇目もふらず通勤する工員の群れや隊列を組んだ動員学徒が、井の頭公園の松林を通りました。女学生たちは本社工場の門を入ると、「撃ちてし止まん」「米英撃滅」と全員で大声で唱和し、鉢巻きをしめ仕事につきました。」
- 53) 『生きているユダ』は、松本清張の『日本の黒い霧』と並び、ゾルゲ事件において共産党の幹部であった伊藤律が裏切り行為を働いたという疑惑を広めた書である（タイトルはこのことに由来する）。その後、中国で幽閉生活を送っていた伊藤の身の潔白が立証され、現行の『日本の黒い霧』（文春文庫）には「革命を売る男 伊藤律」の章に続けて、2013 年に出版社編集部による内容についての注釈記事が加えられている。

【文献】

阿川弘之、2017、『あひる飛びなさい』（ちくま文庫） ＊原著は 1963 年に筑摩書房刊

『朝日新聞』2008 年 6 月 4 日

新井智一、2005、「東京都福生市における在日米軍横川基地をめぐる『場所の政治』」東京地学協会『地学雑誌 114（5）』：767-790

安藤宏、2009、「太宰治と“東京”——『東京八景』を中心に」『東京大学国文学論集 4』：189-204

石川巧、2007、「去勢された喰い——太宰治『メリイクリスマス』論」『太宰治研究 15』：1-19

伊奈正司、2015、『やけあと闇市 野毛の陽だまり——新米警官がみた横浜野毛の人びと』、ハーベスト社

猪野健治編、1978、『東京闇市興亡史』、草風社

井上ひさし・こまつ座編著、2002、『太宰治に聞く』（文春文庫） ＊原著は 1998 年にネスコ刊

井上雅雄、2013、「占領下の映画産業と大映の企業経営」『立教経済学研究』巻 66（4）

映画世界社、1951、「特集 映画と税金」『映画世界』1951 年 5 月 1 日号

大島幸夫、1976、『戦後民衆史：人間記録』、毎日新聞社

尾崎秀樹、1959、『生きているユダ』、八雲書店

小沢昭一・永六輔、2007、『色の道商売往来——平身傾聴裏街道戦後史』、ちくま文庫

鎗木恵喜、1976、『戦前戦後社交（料飲）史』、日本社交タイムズ社

鎗木清一、1972、『秘録進駐軍慰安作戦』、番町書房

加藤政洋、2009、『敗戦と赤線——国策売春の時代』、光文社新書

貴志謙介、2018、『戦後ゼロ年 東京ブラックホール』、NHK 出版

木村知恵子、2014、『占領下の東京下町——『葛飾新聞』にみる「戦後」の出発』、日本経済評論社

桑原才介、2011、『吉祥寺横丁の逆襲——“街遊び”が10倍楽しくなる本』、言視舎

恵泉女学園大学平和文化研究所編、2007、『占領と性——政策・実態・表象』、インパクト出版会

紅野敏郎他、1977、『展望戦後雑誌』、河出書房新社

国際基督教大学農村厚生研究所、1957、『三鷹市—社会生活の諸相—』農村厚生研究所紀要；第1号

国際基督教大学社会科学研究所、1964、『近郊都市の変貌過程—三鷹市総合調査報告（国際基督教大学学報2-A）』

小坂一也、1990、『メイド・イン・オキュパイド・ジャパン』、河出書房新社

小林大治郎・村瀬明、[1961] 2008、『みんなは知らない国家売春命令』、雄山閣出版

小松良郎、2011、『三鷹事件 新訂版』（同時代社）＊原著は1967年に三一書房刊

小山清、1997、『風貌—太宰治のこと—』（津軽書房）＊記事の初出は『風雪』1950年7月号

佐賀忠男、1981、『別府と占領軍——ドキュメント戦後史』、「別府と占領軍」編集委員会

坂口勇造編、1949、『R・A・A協会沿革誌』『性暴力問題資料集成：編集復刻版 第1巻（1945年10月-1949年8月）』、2004、不二出版

時事通信社、1949a、『映画年鑑 1950年版』

時事通信社、1949b、『ルポルタージュ 前進座』『レポート』1949年6月号

宍戸幸七、2006、『三鷹の歴史—江戸時代から昭和中期にかけて—』、ハタヤ書店

信濃毎日新聞社、1952、『信濃産業大観』

芝田英昭、2022、『占領期の性暴力——戦時と平時の連続性から問う』、新日本出版

下川正晴、2020、『占領と引揚げの肖像・BEPPU 1945～1956』、弦書房

『週刊ポスト』1999年9月17日号

ショパン猪狩、1989、『レッドスネーク coom on! ——笑いの王様東京コミックショウの誕生まで』、三一書房

末三郎、1950、『キャバレーを買収して発足した三鷹中学』『教育現実』1950年1月号、教育図書株式会社

鈴木二郎編、1956、『都市と村落の社会学的研究』、世界書院

住本利男、2014、『占領秘録 改版』、中公文庫 ＊初出は毎日新聞社、1965年

「戦争と女性への暴力」リサーチ・アクション・センター編（西野瑠美子・小野沢あかね責任編集）、2015、『日本人「慰安婦」——愛国心と人身売買と』、現代書館

高橋一郎・佐々木守、1997、『ジャズ旋風—戦後草創期伝説—』、三一書房

太宰治、1944、『東京だより』

——、1947、『メリイクリスマス』『中央公論』1947年1月号

田中徳治、1950、『六・三制施設整備の経過と今後の問題について』文部省管理局『六・三制教育の礎』（平原春好責任編集、2007、『教育基本法問題文献資料集成.2 第11巻』、日本図書センター所収）

谷川建司、2002、『アメリカ映画と占領政策』、京都大学学術出版会

『多摩タイムス』1947年1月26日

田宮虎彦編、1971、『戦災孤児の記録（シリーズ・戦争の証言 ; 2）』、太平出版社）＊原著は1947年に文明社出版部刊
ジョン・ダワー、2001、『敗北を抱きしめて——第二次大戦後の日本人 上』、岩波書店
土屋恂写真・安田知代編、2011、『懐かしの吉祥寺 昭和29・40年』（ぶんしん出版）
戸石泰一、2020、『青い波がくずれる——田中英光／小山清／太宰治——新装改訂版』（本の泉社） ＊原著は1972年に東邦出版社刊
『東京人』2008年12月増刊号
東京大学学生部編、1961、『東京大学学寮15年史：1945-1960』年
東京百年史編集委員会、1972、『東京百年史 第5巻』
ドウス昌代、1979、『敗者の贈物——国策慰安婦をめぐる占領下秘史一』、講談社
『都下新聞』1948年2月1日
永井良和、1991、『社交ダンスと日本人』、晶文社
中條克俊、2006、『君たちにつたえたい 朝霞、そこは基地の街だった。』、梨の木舎
中村翫右衛門、1980、『劇団五十年——わたしの前進座史』、未来社
西川祐子、2017、『古都の占領——生活史からみる京都 1945-1952』、平凡社
日本無線、1971、『日本無線55年の歩み』
橋本嘉夫、1958、『百億円の売春市場』、彩光新社
林聖子、2012、『風紋五十年』、パブリック・ブレイン ＊記事の初出は「風紋二十五年」の本をつくる会『風紋25年』（1982）
平井和子、2014、『日本占領とジェンダー——米軍・売買春と日本女性たち』、有志社
——、2023、『占領下の女性たち——日本と満洲の性暴力・性売買・「親密な交際」』、岩波書店
広田和子、2009、『証言記録 従軍慰安婦・看護婦』、新人物文庫 ＊原著は1975年に新人物往来社刊
福富太郎、2004、『昭和キャバレー秘史』、文春文庫＋PLUS ＊原著は1994年に河出書房新社刊
藤目ゆき、1997、『性の歴史学』、不二出版
別所直樹、1964、『郷愁の太宰治』、審美社
——、1974、『太宰治失意の遺書』、世紀社出版
法務府検務局、1950、『三鷹事件公判速記録4（第七回公判・第八回公判・第九回公判）』
法務府検務局、1951、『三鷹事件公判速記録6（第十二回公判・第十三回公判・第十四回公判）』
『毎日新聞都下版』1948年1月15日
松澤春雄、1956、『わがガスストーブいまいづこ』『日本瓦斯協会誌』第9巻第10号: 20-22
松原新三郎、2005、『三鷹町立中学校に赴任した当時のこと』『波乱にみちた たたかい——武蔵野・三鷹地域の戦後の活動を語り継ぐ』〔私家版〕所収
松本康、2010、『三鷹市における郊外レジームの形成と再編——市民協働型都市経営レジームの成立？』、『グローバル都市研究』3号、立教大学グローバル都市研究所: 27-57
松本侑子、2009、『恋の蛍——山崎富栄と太宰治——』、光文社
三鷹市議会史編さん委員会、1982、『三鷹市議会史 記述編』、三鷹市議会
三鷹市教育委員会社会教育課、1990、『みたかの昔——写真集——』、三鷹市教育委員会
三鷹市教育史編纂委員会・三鷹市教育センター編、1993、『三鷹市教育史 通史編』、三鷹市教育委員会
三鷹市史編纂委員会編・三鷹市教育委員会事務局生涯学習推進室市史編纂担当、2001、『三鷹市史 通史編』、三鷹市三鷹商事、1947、『月報みたか』〔No.1（1947.3.15）-No.10（1947.12.15）〕（欠：No.2） ＊プランゲ文庫所蔵
三鷹市女性史聞き書きの会、2003、『三鷹の女性史』、『むさしの文庫』刊行準備会
三鷹書房編、1947-1948、『三鷹書房入荷週報』〔No.1（1947.8.24）-No.48（1948.10.11）〕（欠あり） ＊プランゲ文庫所蔵

三鷹書房編、1946-1947、『新樹』[1巻1号(1946年5月)-2巻2号(1947年4月)] *プランゲ文庫所蔵(プランゲ文庫所蔵の資料では検閲部分も確認できる)

三鷹市役所、1950、『三鷹市勢要覧 昭和25年版』

宮崎刀史紀、2003、「文化政策へのまなざし——入場税撤廃運動の変遷と意義」『文化経済学』3巻3号

村上勝彦、2022、『進駐軍向け特殊慰安所 RAA』、ちくま新書

村上しほり、2018、『神戸 闇市からの復興——占領下にせめぎあう都市空間』、慶應義塾大学出版会

マイク・モラスキー、2006、『占領の記憶／記憶の占領——戦後沖縄・日本とアメリカ』、青土社

山内祥史、1996、「「メリイクリスマス」の素材と原稿について」『太宰治研究3』

山田盟子、1992、『占領軍慰安婦』、光人社

与謝野光、1990、「敗戦秘話・『占領軍慰安』備忘録」『新潮45』1990年5月号

吉見義明、2019、『買春する帝国——日本軍「慰安婦」問題の基底』、岩波書店

*太宰治の著作については、ちくま文庫版全集を参照した。

プロフィール

長嶺 修（ながみね おさむ）

三鷹市出身・現住。音楽の情報・流通関連の職歴があり、ラテン圏あるいはカリブ海域を中心に、世界の様々な都市や辺境から発信される音楽に関心を寄せてきた。それがまた、どういう風の吹き回しで地域の歴史を調べてみる気になったんですか、と時折聞かれることがある。共通してあるのは「エグゾチスム」（異なることを把握すること）だと思っている。自らが生活する地域であっても、少し時間を遡ると、そこには今とは違った「風景」が広がっていたりする。それは、どこかの街の片隅などで、異国的な旋律やリズムと巡り合う体験に重なる。目下、地元の三鷹で就労しつつ、日曜歴史家たるべく三鷹を含む多摩地域の近現代史を独習中。
